

炭鉱における囚人労働

田 中 光 夫

目 次

序 章	43
第一章 官営時代の囚人労働	
1. 囚人労働の発生	52
2. 各県囚徒の概況	56
3. 三池集治監の開設	57
4. 囚人の取扱いと労働状況	59
第二章 幌内炭砦の囚人労働	68
第三章 三井経営下における囚人労働	
1. 三池炭砦払下げと各監獄の推移	73
2. 労働環境と労働の実態	79
第四章 賃 金	93
第五章 囚人労働の終焉	109
む す び	118

序 章

我が国の炭鉱における囚人労働は、明治前期の資本主義生成の時期を中心に発生・展開し、監獄部屋・納屋制度などとともに、この時期を最もよく象徴する特殊な労働形態である。

外国においても列強の海外植民地進出の当初は、囚人を移送しその強制労働によって開発が行われたことは、オーストラリア・ニューギニア・ギアナ・シベリヤ等にその例をみることができる。

囚人や浮浪者を捕え、刑罰として炭鉱や鉱山に使役したことは日本だけでなく、外国でも行われたことでイギリスでも17世紀後半、石炭業者・製塩業者その他の業者は乞食や浮浪者を見つけたら、これを採炭夫や職工として使用してよいと法律で認めている。

ソ連においては現在でもシベリヤ・中央アジア等の炭鉱で囚人を採炭その他に使用しているようであるが、第二次大戦後、満洲・北朝鮮等で抑留した日本人をシベリヤ・中央アジア等の炭鉱に送り込み、強制労働を行わせたことは、まだ我々の記憶に新しいところである。

我が国でも囚人労働の歴史は古く、その最も有名なものは佐渡鉱山である。幕府は安永7年(1778)以降、江戸をはじめ各地の無宿者を捕えて佐渡に送り坑内の水替人足として強制労働を科したが、以後明治のはじめまでずっと行われている。

北海道白糠炭山は安政4年(1857)に採掘を開始したが、人口稀薄な当時のこととて労働者の確保が難しかったので、函館奉行に請願して、次のように罪人その他不身持の者を送ってもらい、これを採炭夫として使用している。

「伝次郎

其方儀大黒町藤兵衛外一人方へ入湯に罷越、揚場に脱ぎ有之衣類金子等盗取始末不届に付、入墨敵申付、但入墨乾の上は蝦夷地クスリ領シラヌカ場所へ石炭掘人夫として差遣す

中町九蔵 倅 徳松

其方儀身持不埒に付親共並に町役人一同願の通り、東蝦夷地クスリシラヌカ場所石炭採掘人夫として差遣す」

(1)

また慶応年間に幕府は横須賀製鉄所の海岸埋立工事に寄場人足を使用した。明治に入ってから新政府は軽罪人を雑役夫として使役するなど、囚人労働の例は多いが、これが最も大々的に、継続的に行われたのは三池炭鉱への就労と北海道開発への囚人の投入であった。三池炭鉱では官営移管直後の明治6年5月から昭和5年12月に至るまで約60年間にわたってつけられ、幌内炭礦

では明治15年、空知集治監の開設と同時に就労し、27年11月に廃止されている。

この小論は、この両炭鉱につき、特に三池炭鉱を中心として囚人労働の推移と意義を概観し分析しようとするものである。

近代文明は鉄と石炭を基礎として発展したといわれるように、石炭は熱源・動力源・あるいは原料として明治初年以來、我が国資本主義発展の原動力としての役割をはたし、第二次大戦後も廃虚と化した我が国復興のための最重点産業として、傾斜生産の頂点に立ったが、昭和30年代のはじめ頃からはじまったエネルギー革命によって石油にその座を奪われ、斜陽産業から没落産業への道をたどってきた。国民生活に最も関係の深い食糧とエネルギーの対策には、何にもまして確固たる長期の対策が必要であるのに、長期的な見通しを欠く政府の場当り的な石炭政策等によって、石炭は見捨てられ、かつて全国で820余を数えた炭鉱は、雪崩的に壊滅し僅か十数年の間に40鉱を割り、50万を超えた炭鉱労働者も現在ではわずかに3万余にすぎない。産炭地域は失業と貧困と鉱害だけが残し地域ぐるみにスクラップ化されている。国家の重要産業が僅か十数年の間に、約200億屯と推定される埋蔵資源を残したまま、崩壊するということは他に例のない異常な現象で、石炭以外にほとんどエネルギー資源を有せぬ我が国としては、あまりにも無定見であり、こうした先見性のない場当り的なエネルギー政策が今日の危機をもたらしたのである。かつて全国出炭額の50%以上を生産し、その最も盛んな時期には200余を数えた筑豊炭田の諸炭鉱もそのほとんど全部が閉山し、福岡県でも一、二の露天掘鉱を除けば三池炭鉱と、隣接する同系の有明炭鉱を残すだけとなった。

全国の諸炭鉱の相次ぐ消滅の中で、過去100年間にほぼ2億屯近い石炭を掘り出した三池炭田は、なお理論可採埋蔵炭量、約15億屯を有し、第五次石炭政策の昭和50年—2000万吨体制の中心としてその約3割を負担することになるであろうし、ますます深刻化するエネルギー危機の中で、三池炭鉱に対する期待は今までも増して大きなものとなるであろう。

明治12年官営で発足した幌内炭鉱は、22年11月北炭に払下げられた後も、夕張炭礦等とともに同社の主力として発展をつづけてきたが、開坑以来100年に近い歳月を経た今日にもなお常用労働者1,700余名をかゝえ月産約12万屯を出炭している。(註・昭和48年11月)

三池炭鉱はその発見の歴史が最も古く、文明元年(1469)といわれるが享保6年(1721)に柳河藩執政小野春信によって開坑されて以来、小野家が経営したが、その後石炭の利に着目した三池藩も隣接地に開坑し、この両藩営マニュファクチュアは当時としては珍しいほどの大がかりな経営規模で採炭を行っていた。

明治6年の官収後の数年間は、その出炭額において、最も早く近代技術を導入した高島炭鉱に比べて劣っていたが、12、13年以降はこれを追い越し以後、資本制生産の発展に伴う、さまざまな重大問題を引き起しながらも、我が国を代表する世界的な巨大炭鉱として今日に至ったもので、明治以来百余年にわたる我が国石炭産業の歴史の中に占める三池炭鉱の位置とその役割は他に絶して大きなものがあつた。

その三池炭鉱1世紀の歴史の中に繰り上げられた約60年間にわたる囚人労働は、文字どおりの血汗の犠牲の上に三池炭鉱を支え、官営時代から三井時代にかけて三池炭鉱発展の人柱となり、三井独占資本確立の基礎を築いたのである。

明治政府は明治6年に三池炭鉱を官収し、国家資本によって経営を行うことにしたが、差しあたつての最も重要な問題は労働力の確保ということであつた。藩営マニュファクチュア時代から労働者の多くは現金稼ぎを目的とする家計補充的な近傍の農民であつたため、農業の繁閑によって操業にも支障が起るような状態でありまた、当時の炭鉱労働者は地下労働という、その仕事の特殊性と、最下級の労働者として、社会から賤業視され蔑視されていたことなどによって、炭田周辺の農漁村に潜在する過剰労働力を顕在化して、早急に調達することは非常に困難であつた。そのため過渡期の空隙を埋める差し当りの試み

として、とられたのが三潞県囚徒の使用であった。

この試みが好結果をおさめたので、これに自信を得て本格的な囚人の使用に踏み切るのであるが、囚人労働という特殊な労働形態が60年もの長年月にわたって継続するためには、使用する側にも、提供する側にもそれだけの理由と利益がなければならない。

炭鉱側からみた利益

1. 一定の集団的労働力を常時、安定的・計画的に使用することができる。
2. 厳重な監視・監督の下に長時間かつ高密度の重労働を、強制することができる。
3. 賃金がきわめて低廉安価である。
4. 募集費が不用である。
5. 住宅や福利施設が不用である。

石炭産業は土石採取業と運搬業を合わせたものなどといわれるとおり、労働集約的な産業であるが、機械化の進んでいなかった時代には特に人力に依存する部分が多く、不熟練労働者の人海戦術も有効であり、しかも無期徒刑をはじめ長期囚が大部分を占める集治監囚徒の場合は、在監年数が長くなればなるほど一層、熟練度が高くなるという利点さえ生じてくる。

その賃金は非常に低廉で三池では一般労働者の半分以下、幌内では「二十分の一以下のものから二分の一程度のものにわたり、平均して四分の一程度⁽²⁾」となっている。一般に炭鉱労働者の移動率は他の産業に比べて極端に高く、当時においては炭鉱労働は鶴嘴・雁爪・搔き板などの簡単な労働用具さえあれば、誰にでもできる土工的な単純労働であったから、鉱夫はよりよい条件を求めて炭鉱から炭鉱を渡り歩き、特に大小の炭鉱が密集していた筑豊地方では、鉱夫は全炭鉱の共有とさえいわれたように、その流動の激しさは他産業に比べて驚くべきものがあり、これがさらに労働力不足を助長することになった。炭鉱の労働力不足は終戦後の一時期を除き、その100余年の歴史を通じてほとんど慢性的であったが、三池炭鉱もその例外ではなかったので、安定した集団労働力の確保

は大きな魅力であり、さらにこれが安価に使用できるということは、何ものにも優る利点であった。

行刑側の要請

自由刑は犯罪者を監獄に拘束することを要件とする刑罰であって、その本来の目的は罪囚を矯正して、再び過ちを犯させないところにある。しかし明治初期には封建遺制がなお根強く残存していたため、当時の監獄は必ずしも罪刑法定主義に対応するものではなく、応報主義的な考え方が支配的であったから、刑罰は犯罪者を社会から隔離し、自由を剥奪することによって威嚇し、苦痛を感じさせることに意義があると考えられ、その結果囚人はきわめて不健康な状況の下で、旧幕時代そのままの非人道的な取扱いを受けていた。明治6年の刑律の改正によって従来の苔・杖・徒・流の4刑を改め一律に懲役刑とした結果、懲役囚が激増した。

明治7年以降になると地租改正や物価騰貴などによって、社会情勢が陰悪となり犯罪が増加したが、さらに西南役の結果有期徒刑に処せられた者、2,764人⁽³⁾を数えているが、その後も反政府的な政治犯の増加などによって在監囚が年々増加していった。

一方これを収容するための懲役場は、その殆んどが幕府時代のものを引きついだ不完全なもので、国家財政窮迫の折柄、監房の増改築にまで手が届かず、全国の各懲役場は過剰拘禁の極限に達し、そのうえ監獄吏不足のため逃走・騒擾などが相次ぎ、囚情陰悪で不穏な状況を呈していた。こうした事態の緩和対策として考えられたのが、出張所などの名目で各地に作業所を設置して囚人に定役を課し、過剰拘禁の緩和と作業賦課の一石二鳥を狙う試みであった。明治6年に福島県監獄が四ツ倉村に懲役場出張所を設けて、囚徒数十人を製塩業に従事させたこと、同年滋賀県監獄が政所村鉾山に出張所を設けて、採鉾作業に当らせたこと、10年に岡山県監獄囚徒400余名の生野鉾山分局への出役、群馬県監獄囚徒の小坂村鉾山分局への出役などがその例であるが、三池炭鉱への囚人の投入や、明治7年頃高島炭鉱が囚人を使役したのも同様な意味をもつ

ものであり、囚人の使用は日本資本主義創出の劈頭から始ったのである。

鉱山における囚人の使用は、三池・幌内をはじめほとんど官営の大炭鉱、あるいは政商系の重要鉱山において始められている。監獄の過剰拘禁緩和の方針に副い、囚人集団を一括拘置して使役し、しかも戒護・検束の点で安心できる所ということになれば結局設備のととのった、こうした大規模な炭鉱・鉱山に限定せられざるを得ない。

官営当時の高島炭礦では「最初礦山寮ニ属スル頃ハ長崎県ノ囚徒ヲ以テ之レニ当テシガ、後藤氏及岩崎氏ノ手ニ歸スルニ及ビテハ、以前ノ如ク囚徒ヲ使用セズ」のように僅かの期間ではあったが明治7年頃、長崎県の囚徒を採炭労働者として使役している。⁽⁴⁾

また住友別子銅山でも明治19年、松山監獄出張所を設置し囚人を運搬夫として使役し、20年9月頃には約600人に達していたが、23年3月末限りで廃止した。

こうした囚人の使役が最も大々的に実施されたのは、いわゆる「猛悪不良の徒を集禁する」ための集治監制度の創設で、明治12年の東京・宮城の両集治監開設について14年には北海道樺戸集治監、15年には空知集治監が発足し16年4月には、三池炭山の拡張と、西日本地区の長期囚を収容するために三池炭鉱の近傍に三池集治監が開庁した。

当時の監獄費は「未だ国家財政の基礎鞏固ならず、可成囚徒の工役を以て之が給与を償却せんことを期し」たため「不良者を拘禁すべき監獄は不良者自らの経済に依て独立するべきものにして敢てまた良民の膏血に依るの寄生虫たるなき意を表示」するという考えに立ち「其囚徒に係る一切の費用は惣て工錢を以て弁償し国庫に仰がざるの目的なれば精々督励使役⁽⁵⁾して、囚人関係の費用は原則として彼等⁽⁶⁾があげる工賃によって補うという自足的・収益主義的な作業賦課の方針をとっていた。したがって囚徒に対して厳しいノルマが課せられ「往時規律厳正ならず衛生の途開けざる時代にありては擅に残虐苛察を加え……若くは老疾者を驅って酷待⁽⁷⁾、苦役」してノルマを果させていた。その最も極端な場合は「逃走せるものは斬殺せられ、病囚は斃れて其屍は風雨にさらされる」⁽⁸⁾

(註) 網走分監沿革史⁽⁹⁾

という網走分監囚人による北海道中央道路開さく工事の場合のような無惨な事態さえ起こるのであるが、彼等が受ける残虐・痛苦は自らが犯した犯罪の当然の応報であり、しかも「彼等ハ固ヨリ暴戾ノ悪徒ナレバ其苦役ニ堪ヘズ斃死スルモ尋常ノ工夫ガ妻子ヲ遺シテ骨ヲ山野ニ埋ムルノ慘状ト異ナリ」あえて顧慮する⁽¹⁰⁾必要はない、たとえ死んでも死ねば死に損、代りはいくらでも補充できるという消耗品的な考えから「此等ノ囚徒ヲ駆テ尋常工夫ノ堪ユル能ハザル困難ノ衝ニ当ラシムベキモノ」として一般労働者を使用できないような難工事や、危険な場所に駆り立てて就労させ「過度な労働に従事する者は、異常な速さで死ぬが、亡びゆく者の位置は、⁽¹¹⁾またすぐ補充されて、人物はしばしば替わっても、舞台に変化は生じない」というような、囚人労働力の無制限な喰い潰しが行われた。⁽¹²⁾

三池炭鉱は国家資本によって、通気・排水・運搬等の面では、いち早く機械化が進められたが、基本的な、切羽での採炭作業は、鶴嘴で採掘し、雁爪とエブでかき集めて、籠で運ぶというような状態で、三井移譲後も採炭機構の近代化はさらに強く推進されたにもかかわらず、切羽の機械化はコールカッター・コールドリル・電気ドリル等を導入した大正末期以降のことで、それまでは採炭作業はもっぱら鉱夫の重筋労働に依存していたので、こゝに囚人労働存続の意味があったのである。

要するに囚人労働が発生し、社会の非難を浴びながらも半世紀以上にわたって存続し、労働力給源としての役割を果たしたことは、監獄側の過剰拘束緩和の要請ならびに収益主義的運営と、炭鉱側の集团的労働力を安価で利用できるという利点とが、うまくマッチしたことによるものである。

しかし時代の進運につれ行刑制度が改正されて、懲戒を主目的とする応報的な考え方から、囚人を社会的に改善しようとする教育刑の方向を指向するようになると、次第に囚人の人権が重んぜられるようになり、かつてのように非人道的な取扱いができなくなってくる。また一方生産機構の近代化・機械化の進展は、ようやく良質熟練労働者の確保と、これを直接、経営の掌握下に置く必

要性が生ずるなどの条件が重なって、次第に囚人労働廃止の方向に進むのである。

この小論は、我が国資本主義の発展過程における前期的労働関係の一典型としての、炭鉱の囚人労働の問題をとりあげ、これがいかにして成立し、いかなる過程をたどったか、そして資本制生産発展のなかで、どのような役割を果たしたかについて考察したものであるが、従来の研究においてあまり明らかにされていなかった行刑側面との関係にも検討を加えてみたい。

(1) 久保山雄三「日本石炭鉱業発達史」 17～18頁

(2) 水野五郎「幌内炭坑の官営とその払下げ」

北海道大学経済学研究・9・102頁

(3) 「法務研究」報告書第三六集の六

(4) 吉本襄「高島炭坑々夫虐待ノ実況」明治文化全集第6巻社会篇 10頁

(5) 「日本近世行刑史稿」下 973頁

(6) 「監獄学雑誌」第7巻第8号 20頁

(7) 「三池刑務所旧記」

(8) 「三池刑務所沿革」其の一

(9) 田中修「資本主義確立期北海道における労働形態」

北海学園大学経済論集第3号 101頁

(10) 金子堅太郎、北海道三県巡視復命書、同上 79頁

(11) 同 上

(12) 資本論、第一巻、向坂逸郎訳 349頁(註111)

(註) 炭鉱は、また炭坑・炭砦の字を当て、各企業で、それぞれに使い分けてきた。古くは炭坑といふ現在でも小規模のものはこれを用いている。三池でもはじめは炭砦という字を使っていたが、炭鉱と改め、さらに鉱業所と改称して今日に至っている。小論では原則として炭鉱の文字を使用し、炭坑・炭砦は固有名称または引用文に限って用い、坑は炭鉱の各坑を指す場合に使用した。また一般に炭鉱労働者に坑夫・鉱夫の字を当てるが用語の煩雑を避けるためこゝでは原則として鉱夫とした。

第一章 官営時代の囚人労働

1. 囚人労働の発生

明治政府は明治5年3月、太政官布告第100号を以て「鉦山心得」を發布したが翌6年7月には、さらにこれを整備して、鉦業に関する我が国最初の成文法であり、近代石炭産業創出の起点ともなった日本坑法を發布した。政府が鉦山心得・日本坑法をもって宣明したことは、埋蔵鉦物の所有権は土地の所有権とは無関係に、すべて政府のものであり、政府だけがその採掘権を有するものであるから、政府の許可があつてはじめて私人に採掘権が与えられるものであるという、絶対主義的な鉦山王有制(bergregal)の方針であつた。鉦山心得・日本坑法の公布が三池炭山に与えた影響は非常に大きく、旧三池藩ならびに旧柳河藩家老小野家経営の炭山は死活の問題に直面したので、歎願の結果5ヶ年間に限って請負稼を許可されたが、明治5年1月、生山坑と平野山坑との間に境界争いによる紛争が起り收拾がつかなくつたので、重要鉦山官収の方針をとっていた政府は、これを好機として明治6年5月、三池炭山の官収を決定した。官収はしたものの直接炭山の運営に当たるべき鉦山寮三池支庁開設の準備がおくれたので、正式開庁に至るまでの間、政府は三潁県に監督を委託したが、官営移行と同時に起つた最も緊急な問題は、三池炭山の新しい出発に必要な労働力確保の問題であつた。

安政4～6年当時、小野家経営の平野山坑では「平野山ニテ生活仕居候小前千有余人ノ窮迫ニ差及ヒ就中農業ノ産ニ就カス坑内ノミニテ渡世仕居候者三分通り之アリ」とあることからみて、千人を越す労働者がいたことになるが、隣接⁽¹⁾の三池藩営、生山・稻荷山坑も出炭額等がほぼ平野山に匹敵していたので、労働者の数も大差はなかつたものとみて差支えない。したがって幕末当時三池

の藩営マニファクトリアは、少くとも千数百人の労働者を擁していたことになる。そしてこの中、専業鉱夫が約3割程度でほぼ7割は炭山周辺の家計補充的な半農半鉱の兼業労働者であったと考えてよい。

(註、三池鉱業所沿革史によると、官収直後の労働者数は1,245人となっている。)

官営移管と同時に労働者もそのまゝ引きついでが、炭山周辺の家計補充的労働者は「付近ヨリ採炭ニ著手可致筈ニテ差向夥多ノ坑夫ヲ要シ候。然ルニ同炭山近傍ノ人民ハ農事閑隙ノ時ニ在ラサレハ坑業ニ服スル者無之周年ノ営業時々差支ヲ生ス」の状態⁽²⁾で、農業の繁閑によって労働力の流動が激しいので、専業鉱夫確保の必要に迫られたが、採炭労働は常時死と背中合わせの、生命の危険を伴う肉体磨滅的な重労働であり、炭鉱の歴史の古い三池地方でも鉱夫は間歩掘りなどと呼ばれ最下級の労働者として賤業視されていたため、官業の力をもってしても、必要とする労働力を確保することは非常に困難であった。この結果考えられたのが囚人労働力の利用ということであった。

「石炭が、産業的にも軍事的にも基礎的・戦略的な緊要性をもっているので、資本主義の発展期には、その生産のための労働力の形成集積を経済的自然な排出にまっわけにはいかなかった」ので、労働力創出の最も安易な方法としてとられたのが、殺傷をも含む私刑制の威嚇の下に隷奴的労働を強いた納屋制度⁽³⁾であり、龐大な労働力を一挙に創出する囚人の利用であった。

三潞県では試みに同県監獄の囚人50名を三池炭鉱に送り「これを拘禁場と称し、官営移管後稻荷山笹谷の大浦坑東方に殆んど民家に等しい坑夫小屋を設置してこれを収容し」て龍湖瀬坑と大牟田港間の坑外運搬に使役した。これが三池炭鉱における囚人労働のはじまりで、時に消長はあったが以後官営から三井経営の時代を通じて昭和5年12月に至るまで約60年の長期間にわたって継続されるのである。⁽⁴⁾

明治6年11月、鉱山寮三池支庁が開設され、事業の拡張と設備の近代化をはかることになったが、三潞県囚徒使用の結果からみて、集散常ならぬ炭鉱周辺の村坑夫よりも、囚人使役がはるかに有利だとの結論に達し、積極的に囚人

使用を推進することとなり、8年4月、支庁から大分・白川・小倉・佐賀・福岡の各県に囚徒の派遣方を要請した結果、福岡県は同年10月、熊本県は9年4月に各50名を派遣したが他の3県からは謝絶された。

三池鉱山局、官制の変遷

明治 6年12月～10年 1月 三池鉱山支局 10年1月～16年9月 三池鉱山分局
16年 9月～19年 1月 三池鉱山局 19年1月～19年4月 三池鉱山工業所
19年 4月～21年12月 三池鉱山局

当時の三池炭鉱は「三池採炭の官業に帰せしは実に明治6年にあり爾來監督の方法稍整正するに至りしも其採掘に至りては尙依然として旧習を脱せず排水の如きも一に足踏車を以て之に充て事業の規模見る可きものなく其目的とする処採炭其のものにあらずして寧ろ囚人苦役の良法を得たるに満足するが如く」⁽⁵⁾で、ほとんど藩営マニユの時代と変るところなく、機械化のみるべきものはなかった。

我が国資本主義の早期育成と軍事機構の確立を目指す明治政府は、ひたすら西欧先進諸国の近代的生産様式を導入移植して軍事工業を起し、陸海の交通運輸の機関を創設し、あるいは幼弱な産業資本を保護育成することによって、資本制生産の発展をはかった。

こうして近代産業がようやく勃興の萌しをみせはじめた明治10年以降になると、陸海軍の工廠をはじめ、官営ならびに民間諸工業の発展にともなう石炭需要の増加、船舶用炭の需要増加などにより石炭の増産が緊急の問題となったが、北海道・常磐の炭田はまだ開発の緒についたばかりであり、唐津・筑豊・北松炭田の諸炭鉱はなお依然として旧套を脱しえぬ狸掘式の零細規模のものばかりで、これらに多くを期待できなかったため高島・三池の二大炭鉱に寄せられる期待は大きく、その近代化のために洋式技術の導入が次ぎ次ぎに行われた。

高島炭礦は幕末の慶応4年5月、佐賀藩が英国商社ガラブル商会との合弁事業として開発に着手し英人技術者を雇傭し、明治4年には当時としては驚異的な138尺の豎坑を開さくし、全国にさきがけて近代的な洋式採炭を行なうな

ど我が国唯一の近代的炭鉱であった。

7年1月、政府の重要鉱山官収政策により一旦官収されたが、早くも同年12月に後藤象二郎に払下げられ、さらに14年、三菱会社がこれを譲り受けて、生産規模の拡大と近代化につとめた。

三池炭鉱も高島に拮抗し国家資本によって鋭意、生産機構の近代化を推進した結果「9年度より10年度ニ至ル新工事ヲ起竣セルモノ十有一件ニシテ其中採炭上ニ係ルモノ六件 ……此ニ至テ坑業運輸両ツナカラ大ニ面目ノ改新」される(6)に至った。

生産規模が拡大するにつれて、労働力の需要も次第に増大したが、10年6月には長崎県囚徒50名の派遣があり囚徒数も増加したうえに、農村過剰労働力の流入も次第に多くなって労働力不足もいくらかは緩和されたが、坑内第一線の採炭労働の基幹は依然として囚人労働者であった。囚人労働者の増加にともない、これを収容するための特別の施設が必要となり、8年11月に福岡県監獄三池懲役場が設置されたのをはじめとして、炭鉱の周辺に各県監獄の分監が設置された。

明治9年5月の囚徒数

三潞県	61人	福岡県	47人	熊本県	50人	計	158人
-----	-----	-----	-----	-----	-----	---	------

(註. 9年6月に三潞県囚徒は全員引揚げた)

2. 各県囚徒の概況

明治10年、西南役の勃発とともに従軍々夫の需要がおこり、高賃金で軍夫を募集したので、三池の労働者にも、これを志願して退山するものが多く、ために出炭が減少して一部の作業は休止するの止むなきに至ったが、戦争の終結によって帰山する鉱夫もふえ、労働事情も次第に緩和された。

福岡県監獄・三池懲役場

明治19年、福岡県監獄三池支署と改め、20年に福岡県三池監獄と改称

明治8年10月、平野村に囚人檻舎を設置し囚人50名を収容したのがはじ

まりで、坑外運搬や長谷坑の採炭作業に従事させたが、西南役勃発のため大牟田地方も騒然として不穏な空気がたゞよってきたので、治安上の配慮から、10年2月、全員福岡本監に引揚げたがやがて38人が帰ったので大浦坑の採炭作業に従事させた。

囚徒数 12年末 331人、19年末 379人、21年末 460人
熊本県監獄三池出張所

明治9年4月、稲荷村に囚人小屋を設置して囚人50名を収容したのが最初で、七浦坑の採炭作業に就役していたが、西南役勃発とともに全員熊本へ引揚げた。14年4月に改めて鉱山分局から熊本県に囚徒の派遣方を要請して内諾を得たので、13棟の収容所を新設して200名を受け入れ、大浦坑の採炭作業に就役させていたが、16年9月21日夜、同坑々内で熊本県囚徒による放火暴動事件が起ったので、全員帰県させて使役を中断していたが、21年2月、佐賀県囚徒の引揚げにより労働力不足を来したため、再び熊本県と接渉の結果、同年6月、200余名が来山して大浦坑の採炭作業に従事した。21年末の人員は221名であった。

長崎県監獄、三池懲役分場

10年6月、囚人50名を収容して大浦坑の採炭作業に就役させたが、9月には130名が増派されたのにつゞき逐次増員され13年6月には300名を越えたが、全員大浦坑の採炭作業に従事させた。16年9月の熊本県囚徒による同坑々内火災のため七浦坑に転役させたが、17年4月、全員長崎へ引揚げた。

佐賀県監獄、三池懲役場

明治20年 佐賀県三池監獄と改称

16年5月に佐賀県は長崎県から分県したが、長崎県囚徒の引揚げ後も佐賀県に属する囚徒約200名は引きつゞき残留し、17年末には、222名を数えたが、19年末には194名となり、その後放免が相次ぎ20年末には138名と減少し、21年2月、全員本監へ引揚げた。

3. 三池集治監の開設

明治9年6月、三井物産会社の益田孝は工部郷伊藤博文を動かして三池炭の委託販売の許可を受け、10月1日以降その一手販売権を掌握し、国内はもとより東洋市場進出の足がかりをつかみ「これによって三池炭坑の性格は一変し明治政権の直接的な経済的基盤の一環に組み入れられるに至った」のである。

こうした市場の拡大によって、さらに出炭の増強を迫られることになり、採炭機構の近代化を進めていった。

- 「明治12年 7月 七浦第一堅坑開さくに着手（15年6月完成）
 同 15年 4月 同 第二堅坑開さくに着手（16年6月完成）
 同 年 6月 七浦坑にはじめて6呎5吋ランカッシャ 汽罐3基を設置す
 同 年10月 七浦第一坑々底に24スペシャルポンプ 2台を据付く
 同 17年 2月 七浦坑外にはじめて蒸汽回転篩トロンメル式選炭機を設置す
 同 年 6月 七浦第三坑開さくに着手す 第二坑にキープル式汽機付
 15立方呎扇風機を設置し運転を開始す
 同 18年 七浦坑に蒸汽曳揚機を設置す
 同 21年 3月 宮浦坑汽罐および堅坑捲揚機運転開始す」

これと同時に出炭も年々増加していったが官営時代各年度の出炭高は次のとおりである。

「 第1表

年 次	出 炭 高	年 次	出 炭 高
明治 6年	30,637,800 ^屯	明治 10年	58,275,320 ^屯
同 7年	66,221,428	同 11年	98,137,516
同 8年	32,826,786	同 12年	142,235,149
同(新)8年	98,583,750	同 13年	174,186,296
同 9年	50,900,792	同 14年	163,612,538

年 次	出 炭 高	年 次	出 炭 高
明治 15 年	149, 247, 388	明治 19 年	288, 737, 432
同 16 年	167, 936, 360	同 20 年	327, 377, 458
同 17 年	251, 612, 724	同 21 年	373, 991, 632
同 18 年	183, 495, 480		
備 考	註：初年度の 6 年は 7 月～12 月の 6 ヶ月間を示す。7 月以降は会計年度の変更により次のとおりとなる。 (1) 7 年度は 1 月～12 月 (2) 8 年度は 1 月～6 月 （6 ヶ月分） (3) 新 8 年度は 8 年 7 月～9 年 6 月 (4) 9 年度以降は 7 月～6 月 (5) 18 年度は 18 年 7 月～19 年 3 月 （9 ヶ月分） (6) 19 年度以降は 4 月～3 月 (7) 21 年度は筑豊炭礦誌による。		

(9)

採掘個所の増加、採炭技術の進歩などによって第 1 表にみられるように、12～13 年頃になると出炭も飛躍的に増加し、排水・運搬面の機械化にはみるべきものがあつたが、坑内の採運炭の作業は旧態依然として専ら人力に頼らざるを得ぬ状態であつた。したがつて出炭増強の要請に応えるためには更に大量の労働力調達の必要に迫られたが、労働市場の狭溢だった当時、地理的に孤立した三池炭鉱の急速な発展に応ずるだけの労働力を確保することは不可能であつた。結局、使役囚徒数を増加して囚人の苦役労働に依存せざるを得ず、しかもそれが最も確実であり、有利であるということになったが、各県の囚徒を増員するとしても、その派遣しうる囚徒数には自ら限度があり、かつ監督・統轄の方法についても各県それぞれの方針があつて、その間必ずしも円滑を期しがたいため、使役上不便な点も多く、また囚人の増減が一定せず労働力の確保が非常に不安定だったので、構想を新にして、各県分監とは別に一大集治監を設置し、大々的に囚人労働力を結集しようとする計画が立案された。

明治15年「9月18日 此ヨリ先7月採炭事業ハ逐日ニ拡張シ、目下七浦坑モ既ニ炭脈ニ鑿到セルヲ以テ坑夫ノ増員ヲ要スルコト急且ツ多数ナリ、然リ而テ従来ノ経験ヲ顧ルニ傍近農民ハ農事ノ閑隙ヲ以テスルヲ以テ専ラ之ヲ使用スルヲ得ス、先年来近県ノ囚徒ヲ役セルニ彼此便益ヲ得、此ヲ以テ近傍ニ一ツノ集治監ヲ建設（費金六万円）シ、中国四国九州各県の囚徒二千人許ヲ驅テ之ヲ使役セハ其益大ナルヲ分局ヨリ本省ニ申請ス。乃チ之ヲ内務省ニ協議シ此ニ於テ該省ト連署シテ太政官ニ稟請（八月七日）ス、此日允裁セラル⁽¹⁰⁾」。認可をま⁽¹⁰⁾って早速土地買収に着手し、下里村に、第一期工事が落成したので、明治16年4月14日に開庁し、5月5日から囚人を就役させたが、釧山分局との連絡を密にし運営に万全を期するため、釧山分局主任、小林秀知に内務省小書記官を兼任させた。

この結果、囚人労働力は飛躍的に増強され、囚人は三池炭釧労働力の根幹として、近代的生産関係の中に組み込まれることになった。これとほぼ時を同じくして北海道開発に囚人を投入する目的で、14年9月に樺戸集治監が開設されたのをはじめとして、15年7月に空知集治監、18年11月には釧路集治監が開庁し、本土から重罪囚が転送されたが、さらに24年には網走分監、28年には帯広分監が設けられて凄惨苛烈な囚人労働が展開されるのである。

4. 囚人の取扱いと労働状況

各県の囚徒は次第に増員されて全員、大浦坑に就労し、採炭労働の中核として形成されていったが、各県分監がそれぞれ独立して、その県独自の方針で取締りに当たっていたため、囚徒数の増加にともない全体的な連絡・統轄上不便な点が多かったので、統一しようという意見がまとまり14年6月、福岡・熊本・長崎の三県分監が協定して次のような取締法を設けた。

「囚徒就労中取締法改正要領

一、従来当局の下掛に授業手の名義を兼佩せしめ囚徒就労中事業上に係る一切の指揮を司どらしめること。

二、授業手の名代にては公然囚徒を戒護するの権なきに付き、各県より看守

1 名乃至 2 名を付して戒護の責に任すること。

三、囚徒規則を犯すか或は事業上指揮に従はざる者ある時は授業手に於て現に認むる時は之を取押へて各県看守へ引渡すこと」。

〔坑内押丁心得⁽¹⁾〕

第一条 事を典獄に受け看守長の指揮に随ひ坑内囚徒をして怠慢の所為之なき様督励す可し。

第二条 坑内詰押丁は、24 名を以て仮に定員とし甲乙の二部に分ち一部一昼夜の勤務とし又其一部を分けて三受持とす。福岡県、熊本県、長崎県。

第三条 各県より就役せしむる囚徒は、坑口見張所前に於て、先きに受取りたる本県看守と共に、坑内に連行き、各受持切羽に於て就役せしむ可し。但し本県囚徒も同様たる可し。

第四条 当日終役すれば看守と共に、坑口見張所前に連行き整列せしめ各県看守立会の上番号を以て人員を改め、引渡す可し。但本県囚徒も同様たる可し。

第五条 坑内鉄道捲立の場所に設置しある見張所より昼夜共間断なく受持切羽に就き、使役上怠慢の所為之れなく督励して其科程を終らしむ可し。若し右等怠慢の所為再三に及ぶか其他犯則の所為を認めたるときは、直に身柄坑口見張所に引渡し置き、追てその旨書面を以て看守長に申報す可し。

但、其犯則者他県の囚徒に係るときは、坑口看守所に引渡し置き、然して各本属看守長へ申報す可し。

第六条 囚徒授業の事に就ては鉾山分局結吏員の監督を受くへし、但、待遇並に戒護上の事に就ては各県看守長の監督を受くことある可し。

第七条 坑内に於て囚徒取扱は、各県共異同之なき様注意す可し」。

以上によって坑内就労中の囚人の取扱いや監督の状況を知ることができるが、採炭作業は暗黒の坑内における労働であるから、わずかに薄暗い灯火で作業者の所在を識別することができる程度なので、その監督は非常に困難であった。

各人の採掘した石炭は、定められた炭函に積み込むのであるが、この場合炭函を一杯にするために悪炭（硬）を混入して、科程をごまかしたりすることが

あったので、次のような罰則を定めた。

1. 炭函1函中に10斤以下の悪炭を混入したもの 減食1日、ただし情状によっては減食3日に処することがある。

2. 同20斤以下 減食2日。

3. 同30斤以下 減食3日。

4. 同40斤以下 屏業5日。

5. 同50斤以下 屏業10日。

6. 同50斤以上100斤以下 1ヶ月以上3ヶ月以下の屏業。

7. 同100斤以上 4ヶ月以上6ヶ月以下の屏業に、満1ヶ年間の絶信を付加する。

8. 1人で数函へ混入したものは前条各項に照して処罰する。⁽¹³⁾

採掘した石炭を炭函に積込む際、若干の悪炭が混入するのは止むを得ないので、10斤以下は認めているが、それ以上の場合は上記のように嚴重に処罰している。

1函(700斤入)に対してわずか10斤の悪炭混入に減食1日の処罰を科しているが、採炭作業は他に比類のないほどエネルギーを消耗する仕事であり、しかも食うこと以外に楽しみのない囚人にとり、減食は非常に辛い処罰であった。(註、現行、監獄法にも減食・屏禁の罰則がある。)

「採炭服役中は総て数多共同の役に従事するを以て常に口論争斗止む時なく或は圀圍間に於て物品を受授し若しくは包蔵し時としては官吏に暴行を加へ」⁽¹⁴⁾るなどのことも多かったので戒護はきわめて厳しく、「坑内作業の囚徒の脱走を防ぐ為に坑口に鉄砲を持った監視人が立って居った。明治16年に坑内の囚徒が暴動を起して之を鎮圧する為に囚徒を竹槍にて刺し殺したこともあった」と団琢磨が語っているような非人道的なことさえ⁽¹⁵⁾行われていた。

人間社会から疎外され、厳しい罰則と銃剣の監視の下にノルマを課せられ、天日を仰ぐことのできない坑底で、いつ果てるともしれぬ肉体消磨的な重労働に駆使

される長期徒刑囚の生活は悲惨きわまりないのであった。圀圀の苦しみと労働の過酷さに対する彼等の不平・不満がしばしば暴発し衝動的な暴動となってあらわれている。

明治十六年、「九月二十三日 一昨日午後七時三十分大浦坑内就役ノ熊本県囚徒、局員下掛ニ向テ暴行シ、機械胴縦柱ニ油ヲ注キ火ヲ放チ石炭ニ延焼シ坑内総テ烟蒸ス。此時坑内就役夫三百九拾五人（中ニ就テ福岡県囚徒六拾人 長崎県同四拾一人 熊本県同七拾七人 常民貳百拾七人ナリ）馬貳拾六頭下掛三名ナリ。囚徒ノ暴動ヲ聞クヤ直ニ坑外ニ遁レ出ルアリ濃煙ニ遮断セラルルアリ。此ニ於テ旧坑口ノ火炉ニ火ヲ点シ、其煙氣ヲ坑外ニ放出シ、稍ヤ烟氣ノ稀薄ナルヲ得、少シク坑内ノ通気路開クルヲ以テ坑夫数拾名、馬拾三頭ヲ救出シ下掛三名モ亦僅ニ脱出ス、而シテ尙ホ若干ノ坑夫火烟中ニ在ルアリ。（後チ之ヲ調査スルニ常民坑夫貳拾貳名 囚徒貳拾四名 馬拾三頭ナリ）ト雖モ而モ之ヲ搜索救出スルノ途ナクシテ火氣益々蔓延ス。此ニ至テ坑内ノ空氣流通ヲ止メ之ヲ防クノ外索ナキヲ以テ、本日午前一時ニ至テ坑口密閉ニ着手シ午後六時ニ至テ全ク密閉セリ」。この時大浦坑内には囚人178人、良民217人の計395人、⁽¹⁶⁾馬26頭が稼働していたが、うち囚人24人、良民22人、馬13頭は救出の見込みが立たず、鉱山局・集治監・各県典獄および警察が協議の結果、これらを火焰と黒煙の渦巻く坑内に閉じ込めたまま各坑口を密閉した。このため大浦坑は一時廃坑となったが、約1年がかりで復旧整備を終わり、17年10月から再開したが、その損害は11万2000円にのぼった。囚徒暴発の原因は長期囚としての絶望感と、嚴重な拘禁下における苛酷な労働条件や強権的な監督者に対する感情的な反撥が、些細なことを動機として、自らを焼くとともに全坑を灰燼にし、同輩を道連れにして現実の苦患を逃れようとした衝動的・自暴自棄的な反撥であるといつてよい。

この結果、熊本県囚徒の使用は中止となり16年10月末全員熊本に引揚げ、福岡、長崎両県の囚徒は七浦坑に移された。

この事件をかえりみて鉱山局では十七年一月、「二十二日 事業日ヲ逐フ

テ拡張シ、坑夫職工其他ノ来聚スルモノ日ニ増加シ、無頼不逞ノ徒も亦之レアリ、曩ニ集治監囚徒ノ暴発セルアリ。近日又大浦坑ニ放火スル等ノ変アリ、将来匪徒ノ暴挙センモ亦計ルヘカラヌ」と懸念し明治十七年一月、「二十九日 大浦坑罹災ノ後ハ単ニ七浦坑ノミヲ維持シテ採掘ニ従事スト雖全ク是レ囚徒ヲ使用スルノ坑場ナルヲ以テ或ハ大浦ノ轍ヲ履ムコトナキヲ保セス。若シ不幸ニシテ此事アラハ該山営業ヲ持続スルヲ得ス」と憂慮した当局はその対策として警衛巡查および坑内下掛を廃し、巡視⁽¹⁷⁾ 40人を雇って内外の警備を固くした。

しかし七浦坑でも明治十七年、「三月四日 午前十時頃囚徒等七浦坑内ニ暴行ヲ為シ器物ヲ破棄シ巡視押丁等ニ迫テ害ヲ加ヘントス。巡視等之ヲ避ク、午後一時ニ至リテ鎮定ス」という事件があり更に「18年12月中集治監の囚人⁽¹⁸⁾に不穩の挙動あり19年1月中彼等の中最も恐悪なるもの⁽¹⁹⁾四十余人」を急に北海道集治監⁽²⁰⁾に移送したが、他のものも北海道移送を恐れて動揺し出炭減を招いてゐる。

当時の集治監囚徒は特に兇悪なものが多く、監督の目の十分に届かぬ坑内では秘かに不穩の行動に出ることもあったようである。

21年には昼夜交代の甲乙2組がそれぞれボスを押し立て、集团的にあつれき抗争して双方ともボスが斃されるなどの争闘を繰り返し囚情が不穩だったので、22年に憲兵22名を監内に駐屯させ、その威圧によって秩序を保った。

17年4月、長崎県囚徒は在監7年で全員引揚げたが、これは引きつゞく不穩な状態の波及を恐れてのことであつた。こうした暴動や紛擾は厳しい拘束と坑内の重労働という二重科役に苦しむ囚人の盲目的な反抗であるが、その裏には国家権力を背景とした圧制と苛虐、徹底的な労働力の搾取があつたことはいうまでもない。このことは反抗すれば竹槍で刺殺したり鉄砲で射殺することが当然のこととされていた、当局の対応の仕方にもよくあらわれている。

21年2月佐賀県囚徒が全員引揚げて囚徒数が不足したので、鉱山局では16年の事件以来、就労を中止していた熊本県に改めて囚徒の派遣方を要請した結果、6月に200余人が来山して大浦坑の採炭作業に就役したが、同年末には

221名になった。

明治22年頃の集治監の敷地・獄舎面積等は次のとおりである。敷地面積等

本 監 5,523坪
構外官舎 656坪
埋 葬 地 600坪
敷地合計 6,779坪
獄舎建坪 360坪

に比較して埋葬地の面積が広く、その約1割を占めていることは、死亡率の高さを示したものである。

(21)

三池監獄過去帖によると明治16年6月から大正14年12月までの死亡者数は2,327人の多きに達している。

官営時代における囚人労働者数の変遷ならびに囚人と一般労働者との対比は次のとおりである。

第2表 官営時代の各監別囚人数

	明治9年	＃13年	＃17年	＃19年	＃21年
三 瀨 県	61				
福 岡 県	47	331	(約) 350	379	460
熊 本 県	50				221
佐 賀 県			222	194	
長 崎 県		(約)300			
計	158	631	(約) 572	573	681
集 治 監			666	864	1,463
合 計	158	(約)631	(約)1,238	1,437	2,144

(23)

第3表 官営時代の労働者数および囚人の良民労働者に対する比率

年 次 別	囚 人 数	良民労働者数	労働者総数	比 率
明治 9 年	158人	858人	1,016人	16%
＃ 13 年	(約) 631	1,357	1,998	32
＃ 17 年	(約)1,238	1,104	2,340	53
＃ 19 年	1,437	1,280	2,717	53
＃ 21 年	2,144	959	3,103	69

(24)

第3表が示すように囚人の労働者総数中に占める比率は、9年の16%から13年は32%、17・19年は53%に上昇し、官営最後の21年には実に69%の高率を示しているが、これをみても当時における囚人労働者の比重がいかにか大きなものであったかわかる。

20年頃になると三池炭鉱の機械化・近代化も次第に進み、経営規模も拡大したが、機械化は竖坑の開さく・汽力曳揚機の設置・排水作業および坑外運搬系統の機械化にすぎず、採炭作業は依然として鶴嘴による採掘・籠による切羽運搬・馬匹による坑道運搬という状態に止まっていたため、坑内の採運炭作業は、まだもっぱら鉱夫の労働力に依存していた。

したがって採炭作業の中軸である採運炭作業に占める囚人の比重は圧倒的に高く、三池炭鉱は事実上囚人労働によって支えられていたといつてよい。

官営時代の収支損益は第4表のとおりで、損失が計上されたのは、官営移行の当初と西南役の際および熊本県囚徒の放火暴動事件の影響を受けた15、16年だけで、他は年々相当な利益をあげている。

「 第4表 官営時代の損益表

年次別	損 益	摘 要
明治 6年	△ 6, 537, 980 ^円	(註) (1) 各年度は 会計年度による (2) 明治6年は 7月～12月 同 7年は 1月～12月 同 8年は 1月～6月 同新8年は 7月～ 9年6月
〃 7年	23, 157, 755	
〃 8年	△ 11, 739, 258	
新 8年	41, 964, 734	
明治 9年	△ 93, 406, 827	
〃 10年	△ 21, 293, 568	
〃 11年	13, 423, 424	
〃 12年	8, 306, 144	
〃 13年	25, 012, 604	
〃 14年	35, 092, 432	

} 西南役のため、
 人員不足し出炭
 減少せしによる

年次別	損 益	摘 要
明治15年	△ 3,004,793 ^円	} 大浦坑々内火災のため出炭減少せしによる
" 16年	△ 51,196,940	
" 17年	126,022,105	
" 18年	64,654,669	
" 19年	155,453,051	
" 20年	164,753,663	
" 21年	不 明	
合 計	471,661,215	

明治9年から17年までは
7月～6月
同18年は
7月～3月
同19年・20年は
4月～3月

(25) 」

官営企業は、大蔵卿 松方正義がいったように「官業ハ大率ネ損失ニ帰シ、政府保護ノ民業モ皆多クハ失敗シ」た中で、三池炭鉱は出炭も年を追って増加し、官業の通弊である非能率の経営をもってしても、なお官営16年間の収益は「興業費ヲ全還スルモ尙其ノ純益ノ総額ハ四十七万壱千六百六拾壱円貳拾壱銭五厘也」と三池炭鉱分局第十六次年報の報告しているとおりである。

これは三池炭鉱の石炭賦存の自然的条件が非常に良好であったことにもよるが、それにもまして囚人労働という原始的な労働関係の上に立ち、国家権力による強圧の下で、徹底的な囚人労働力の収奪が行われた結果であることはいまでもない。こうした囚人の苦役労働に支えられた三池炭鉱は、納屋制度という非近代的な隷奴的労働に支えられた三菱高島炭鉱とともに我が国炭鉱の双壁として、明治政府の目指す近代的産業の早期育成のための基盤産業としての重要役割を果たしていった。

- (1) 稿本「三池炭業所沿革史」前史其一
- (2) 「法規分類大全」第一編、治罪門、3 監獄
- (3) 奥田八二「九州炭鉱業における労働関係の近代化」328頁・(日本近代化と九州)
- (4) 「三池炭業所沿革史」前史其一

- (5) 高野江基太郎「筑豊炭礦誌付、三池炭礦誌」 4 頁
- (6) 「工部省沿革報告」明治財政經濟史料集成第 17 卷 109 頁
- (7) 隅谷三喜男「日本石炭産業分析」120 頁
- (8) 「三池鉦業所沿革史」総年譜
- (9) 同 上 前史 其二
- (10) 「工部省沿革報告」前掲書 111 ～ 112 頁
- (11) 「三池刑務所沿革」其の一
- (12) 同 上
- (13) 同 上
- (14) 同 上
- (15) 男爵 団琢磨伝 238 頁
- (16) 「工部省沿革報告」前掲書 112 ～ 113 頁
- (17) 同 上 113 頁
- (18) 同 上
- (19) 同 上 113 ～ 114 頁
- (20) 同 上
- (21) 「三池鉦業所沿革史」前史、其二
- (22) 武田武久「三池監獄を探る」刑政 昭和47年10月号 35 頁
- (23) 「三池鉦業所沿革史」前史其二および隅谷三喜男「炭鉦における労務管理の成立」250 頁より
- (24) 同 上
- (25) 同 上 其一
- (26) 土屋喬雄「日本經濟史概説」 121 頁

第二章 幌内炭鉱の囚人労働

北海道囚治監は北辺開発のために「多囚ヲ集収シテ専ラカヲ開拓ニ用ヒ国家ノ
経倫ニ副ハン」という趣旨で、明治14年9月の樺戸集治監の開設にはじまり
(1)
15年7月に空知集治監、18年11月に釧路集治監が相次いで開設された。

「当時北海道に集治監獄を設置して之に流徒刑の囚徒を送ると謂ふことには三つの眼目があった。この第一は改正刑法の実施によって処断せられたる長期の受刑者をば北辺未開発の地に送って自耕自食せしめ内地に於ける拘禁の負担を免るゝと共に危険分子を排除して社会的治安の維持を完ふすることであり、この第二はこれら徒流刑囚徒の労働力を活用して北海道の開拓に当らせ国家の資源を開発することであり、その第三はこれら受刑者の悔化遷善を促し、人口稀薄な北海道に安住の天地を与え自立更生せしめんとするにあったのである」。(2)
三集治監は最初内務省の直轄であったが明治19年に北海道庁が置かれるとその所轄となり、20年に樺戸監獄署、空知監獄署、釧路監獄署と改称したが28年7月にはまた内務省の管轄下に入り、36年3月の集治監制度の廃止によって司法省直轄の樺戸監獄、網走監獄、十勝監獄となった。

20年頃、三集治監とも2,000人～3,000人の囚人を収容していたが、これは名目上のことで実際には「外役たる労作は通年囚人数の60～75%を占めて圧倒的に多く、これと当時の日本全体の囚人労働における労作の比率、35%～40%との比較からしても、明らかに北海道における囚人使役の対象乃至は目的が分るであらう」というように北海道集治監の主目的は、もっぱら開発のための外役であったのである。(3)
明治15年樺戸集治監の囚徒がはじめて開墾に従事して以来明治31年までに開墾した土地は「5,276,000坪であって、既墾の多くを民間移住者に払い下げ」(4)ているが特に道路開墾は集治監が北海道開拓に寄与した最も偉大な業績とされ、またこの間に開墾した道路の総延長は178里27町におよび、民間事業によるものよりもはるかに良好な成績をおさめたといわれている。特に有名なのは中央道路開墾工事で、樺戸・札幌両監の囚徒によ

って完成していた上川道路を網走まで延長して、荆棘無尽の山野を伐り開く難工事であった。この工事を完成するために、網走分監の囚徒 800 人を投入したが、逐次増員されて 1,100 余名となった。工事にかゝった時期がちょうど盛夏の降雨つゞきの時期であったが、高温多湿の悪天候のなかで、粗雑な外役所に多数の囚人が雑居し、飲料水や食料の補給も不十分な最悪の条件の下で、牛馬のごとく酷使されたため「過度ノ労働ハ健康ヲ害シ不検束ト役事ノ困苦ハ多数ノ逃走者ヲ出セシモ更ニ他顧ストコロナク一意専心唯工事ノ速成ヲ期」という昼夜不休の苦役によって、延長 54 里 34 町の大工事を僅か 6 ヶ月で完成している。銃剣による厳しい監視・監督の下に苛酷、無惨な労働を強制せられた結果、囚人は続々と斃れ、この期間の出役囚 1,115 名の中、発病者 914 名、死亡者 122 名に達し、苦役に耐えかねて「逃走せるものは斬殺せられ、病囚は斃れて其屍は風雨にさらされる」という悲惨な状態であった。

次に跡佐登硫黄山使役の例をみると、明治 19 年 1 月に釧路集治監の囚徒が出役したが、20 年 6 月栄養失調による水腫病が発生し、約 6 ヶ月間に役人員 300 余名のうち 140 名の病人と 42 名の死亡者を出しているが、死亡原因となった病気の多くが栄養機能の失調による慢性腸カタルであったという。

幌内炭礦は明治初年に発見され、非常に有望な炭鉱であることが知られていたが、11 年に官営が決定して 15 年に空知集治監が開設されると、幌内に外役所を設け囚徒をその採炭機構の中に組み込み、以来 27 年 11 月に至るまで囚徒は幌内炭礦の基幹労働力として就役した。

特に 19 年に同礦が空知監獄の管轄下に入ってから、北海道炭礦鉄道株式会社に払下げられる 22 年 11 月（註、北海道炭礦汽船株式会社）までは、三池炭鉱とは逆に同鉱は空知監獄の付属機関として完全に囚人のための炭鉱であった。

第 5 表にみるように 19 年以降の

第 5 表 囚人労働者使役数

年 次	人 員	年 次	人 員
明治 19 年	809	明治 23 年	1,043
" 20 年	791	" 24 年	1,132
" 21 年	605	" 25 年	920
" 22 年	630	" 26 年	874

囚徒数は600余人から最高1,130余人となっているが「21年は囚人86%、良民14%、22年は囚人82%、良民18%」で囚人の比率が圧倒的に高くなっている。⁽⁸⁾良民坑夫は主として採炭以外の坑道、風坑、風井等の掘さく、支柱および坑内外の雑役に従事したが、囚人は採運炭を中心に坑道の掘さくその他の危険な仕事に振り当てられた。

幌内炭礦は22年11月、北炭に払下げられたが囚徒はそのまゝ引きつがれ、払下げ直後の「明治二十三年三月の一日平均出役労働者数が良民八十一名、囚人五百十六名⁽⁹⁾であった」ことをみても、囚人が坑内労働者の大部分を占めると同時に、坑内労働の中核として事実上幌内炭鉱を支えていたことを知ることができる。20年頃まではまだようやく開発の緒についたばかりで機械化も十分ではなかったが、水準以上の炭層を採掘していたため排水にはあまり苦労はしなかった。

当時、坑道は相当延長していたのに、通気は自然通気にまかせていたので、通気不良のため作業に困難を生ずることも多かった。

「特に坑内外の気温差の少くなる春秋には、自然通気が行われ難く、甚しい場合には<瓦斯ノ為メ坑夫等多クハ眩暈其業ニ就ク能ハ>ざる状態に至り、或いはまた<安全燈ヲ用キテ就業スルモ猶爆発ノ虞アルヲ以テ已ムヲ得ズ暗中採鑿>する場合すらあった」というような悪環境の中での労働状態は「囚人使役法は全く旧式⁽¹⁰⁾で人間扱いしておらぬ。囚人の大部分は専ら幌内炭坑で地下深い坑内で、不完全な設備の中で石炭を掘り出すことが主な仕事である。坑内の空気流通も不充分、且つ落盤の危険性も屢々喧ましく伝えられておった状態下で、朝は早く晩は遅く十時間以上も栄養に乏しい食物を与えられ重労働を強制せられて居った有様であって、懲戒も極端に、人命の価値などは毫もかえりみられておらなかつた⁽¹¹⁾」というような有様であった。

22年夏頃の坑内状況は「匍匐して横坑に入れば業に就く囚徒亦匍匐横臥炭を砕くの声丁々たりと雖も燈火明暗、面を弁する能はず、坑内囚徒を使役するの方、一日を二分し、十二時間を就業時間とす、其外役に発遣せしめられたる囚徒は又之を二分し、一を昼間の就役に充て一を夜間の就役に充つ坑内に昼夜

の別なければなり」ということで昼夜1週間交代の12時間労働であったが生産機構の整備も不十分で、設備は悪く、同じ官営とはいえ、三池炭鉱に比べてまだ原始の状態に低迷していたので、労働条件も悪く弊害も多かった。

「明治監獄年譜」は集治監の外役のうちで最も弊害の多かったのは幌内の炭鉱作業であったとのべているが、特に「坑内は僅かに燈火を以てその所在を弁識し得る程度であるから、戒護検束は徹底せず殆ど無監督の状態となり従て逃走者は多く、賭博・物品の授受・色情関係又それに原因する殺傷事件等が頻出する有様」でありまた坑内の通気の不完全が原因となった硅肺・慢性気管支炎・肺結核・呼吸器関係の疾患による死亡者が多かった。事故や災害等による死亡者も多く24年9月、坑内爆発によって囚徒10人が死亡し、25年3月に

もまた死亡者3名、重傷者9名を出しているが、落磐等による負傷も非常に多かった。

「使役する囚徒は大凡一千人而して負傷者の数は明治十六年に七十九人、十七年に二百三十五人、十八年に三百十五人、年々此の如く増加し終に廿五年には実に千五百九十五人の多きを致し、一人2回近くを負傷をなすに至れり。余が該所を巡見せしは明治二十六年夏なりき当時廢疾者の総計二百〇六人、或は一手なきもの或は一足なきもの空知の分監内に徘徊し五十以上の盲目者一所に整座し、輕役として綿の塵埃を拭分けつゝあるを見殆んど云う所を知らざりき。島地に在るの囚徒固より兇奸無頼の輩多し而れども薄暮手を失ひしもの教導となり、盲者背後より前者の帯に縋りて連々夫の五十以上の盲囚監房に帰るの状を見るもの誰か克く酸鼻の情に堪へんや」と岡田朝太郎博士が述べているように、事故による廢疾者もおびたゞしい数にのぼったので、これが世論を刺戟し、「一営利会社の為恰かも二重の刑罰を科せらるるものなり」という非難を招いたのが幌内炭鉱への出役を廢止した直接の原因であった。

炭鉱労働にしろ土木工事にしろ、特殊な作業環境であるため戒護・監視を厳重に行ったにもかかわらず逃走者が非常に多かった。幌内炭礦では「囚徒は採炭の折、斧頭に木根の現るゝを見て土皮の近けるを察し、更に外部に向て坑道を穿ち逃走の機を」とらえるなどして15年に2人、16年に22人、17年に

15人、22年1人が、24年には48人とふえ25年が11人で、1年間の平均は10人となっている。「開拓史上の北海道集治監」によれば、樺戸集治監創設の明治14年から集治監が廃監になった36年までの逃走者数は795名のほり、逃走者の比率は内地の約10倍になっている。

これは囚人が10年以上の長期囚であったこと、作業の大部が外役作業であったことや、作業が非人道的な圧制のもとにおける牛馬同様の苦役であったことなどによるものであるが、北海道の住民はたえず逃走者の脅威を感じて、枕を高くして安眠することもできなかったという。構外作業の最も大きな弊害は囚人の戒護検束が不十分となって、逃走者のために治安が乱されることであるが、これを防止するためには、いきおい非人道的な処置をとられがちで、北海道集治監では「拒捕斬殺」といって、逃走囚が逮捕を拒否して抵抗した場合には、司獄官が斬殺することを認められていたが逃走者の2割は斬殺されている。

第6表

逃走囚数とその処置状況（明治19～25年）

監 名 度	樺 戸			空 知			釧 路			網 走		
	逃 走 数	斬 殺	未 就 縛	逃 走 数	斬 殺	未 就 縛	逃 走 数	斬 殺	未 就 縛	逃 走 数	斬 殺	未 就 縛
19年	11	3	2	10	4	1	不明	不明	不明	—	—	—
20年	4	1	0	27	17	5	?	?	?	—	—	—
21年	8	2	1	24	3	7	?	?	?	—	—	—
22年	39	4	2	43	9	4	?	?	?	—	—	—
23年	31	0	5	91	5	22	?	?	?	—	—	—
24年	31	0	15	68	5	40	35	13	1	2	0	0
25年	7	1	1	22	7	8	28	5	5	4	2	1
計	131	13	27	281	60	87	63	18	6	6	2	1

- (1) 東邦彦「開拓史上の北海道集治監獄」刑政第 53 卷第 2 号、194 頁
- (2) 同 上 194～195 頁
- (3) 田中修「資本主義確立期北海道における労働形態」
北海学園大学経済論集第 3 号 82 頁
- (4) 東邦彦前掲書、刑政第 53 卷第 2 号、207 頁
- (5) 同 上 217 頁
- (6) 田中修前掲書 101 頁
- (7) 水野五郎「幌内炭坑の官営と払下げ」北海道大学経済学研究 9 101 頁
- (8) 田中修前掲書 87～88 頁
- (9) 水野五郎前掲書 101 頁
- (10) 同 上 106 頁
- (11) 田中修前掲書 104 頁
- (12) 岡田朝太郎「北海道幌内炭坑の外役」日本近世行刑史稿_下 1257 頁
- (13) 東邦彦前掲書、刑政第 53 卷 第 2 号、217 頁
- (14) 岡田朝太郎前掲書 1258 頁
- (15) 辻敬助「明治監獄年譜」刑政第 50 卷 第 12 号、45 頁
- (16) 岡田朝太郎前掲書 1259 頁
- (17) 田中修前掲書 111 頁

第三章 三井経営下における囚人労働

1. 三池炭鉱払下げと各監獄の推移

政府の官営企業払下げ政策によって、三池炭鉱は、三井組名義人佐々木八郎に 455 万 5,000 円の 15 年々賦で払下げが決定し、22 年 1 月 1 日の現形をもって三井の手に渡った。「茲に於いて豊富に新式機械を装置したる諸鉱山の民業に帰したると同時に、各官山に於いて練習したる数十名の鉱山技師亦民有鉱山に従事したるが為、我が国の鉱業界は著しく発展の歩を進め」ることになる

のであるが、国家資本によって近代化された諸施設とともに、米国帰りの新知識、団琢磨以下の技術者・事務員・労働者の多くが、そのまゝ残留し、三池炭礦社として再出発することになったが、三井資本が最も懸念したのは囚人の使役を許可されるか否かということであった。「三池炭礦が三井の経営に移って後、始め良民を漸次多くせんとし肥後の農民を採用したが、坑内作業を嫌ひ悉く逃げ帰った。次で沖繩県八重山の石炭礦が失敗して不要の坑夫あるを幸ひ之を傭入れたが、寒さに耐へず、又深き坑内を怖れて是又悉く逃げ帰った」⁽²⁾のように労働環境の特殊性とその労働の厳しさは一般から敬遠されて、新生三池炭鉱が必要とする労働力の確保は非常に困難であった。三井では三池炭鉱を引き受けるに当り、囚人使用の件について当局の意向を確認するために、三井物産会社理事、西邑虎四郎から内務大臣宛に次の願書を提出している。「三池集治監囚徒ノ義ハ從來専ラ三池礦山ニ御使役相成居候処今般該礦山私ヘ御払下相成候ニ付テハ将来事業上一層鉦夫ノ多数ヲ要スル儀ニ有之 然ルニ該鉦夫ヲ良民ニ募集スルハ頗ル困難ノ場合不尠 好シ募集シ得ルモ到底囚徒ヲ以テ鉦夫ニ充ツルノ使益ニハ若カサル儀ト奉存候ニ付官坑ノ節ノ通り囚徒ヲ借用仕度候間何卒該集治監ハ其儘御据置被下度 且将来ハ一層事業拡張ノ見込ニテ追々御増員モ被成下候様仕度候 此段偏ニ奉懇願候也

明治二十一年九月十二日

佐々木八郎代理 西邑虎四郎

内務大臣 伯爵 山県有朋殿」

この願ひ出⁽³⁾て対して「願ノ趣聞置ク 但シ将来官ノ都合ニ依リテハ該監移転等ノコトモ可有之又囚徒増員ハ三池集治監典獄ニ稟議スヘキ儀ト心得ヘシ」

明治二十一年十月四日

内務大臣 伯爵 山県有朋」

こうして集治監囚徒使役についての不安が取り除かれたので、引きつゞき福岡県知事⁽⁴⁾に対し「囚徒御出役ノ儀ニ付願

来ル明治二十二年一月一日以後三池礦山事業御引受仕候ニ就テハ從來御県ヨ

り御出役相成居候囚徒ノ儀ハ是迄三池鉾山局ト御締結規約ノ内 賞罰準則ヲ除キ
其他ハ從來ノ通りニテ引継キ 御出役相成候様仕度 此段奉願候

明治二十一年十二月二十六日

三池礦山払受人代 団 琢磨

福岡県知事 安場保和殿」。これに対して「願之趣聞届 但シ期限之儀
(5)
ハ本年十一月限りト心得ヘシ。明治二十二年二月二十三日」として許可され熊
(6)
本県知事からも同文の願書に対して、期限を限らずに許可された。

こうして三池集治監・福岡・熊本両県とそれぞれ囚人の使用を保証され、払
下げにあつての最大の不安が解消されたので、三池炭礦社を創立して本部を
東京に置き、現地では団事務長の下に6部5課を設け、囚人労働力を坑内労働
の基幹とする労働機構を編成し民営三井三池炭鉾として再出発した。

三井鉾山社名ならびに三池炭鉾 名称の沿革

明治22年 1月 三池炭礦社
同 25年 4月 三井鉾山合資会社(三池炭礦)
同 26年 7月 三井鉾山合名会社
同 年 10月 (三池炭礦は三井三池炭鉾事務所と改称)
同 44年12月 三井鉾山株式会社(三池炭業所と改称)
昭和48年10月1日 三井石炭鉾業株式会社

こうして我が国最大の三池炭鉾は三井資本の傘下に入ったが、三井との関係
は明治9年6月、物産会社が三池炭の一手販売を引受けて以来のことで、政府
の手厚い保護の下に、三池炭は国内はもとより東洋市場にも進出し、やがて英
国のカーブーフ炭を駆逐して東洋市場を制覇し、物産会社は国家権力との癒着
によって利潤の分け前にあづかり、大貿易商社としての基礎を固めていった。

三井が官営から引きついだ囚人数は次のとおりである。

三池集治監	1,463人	
福岡県三池監獄	460人	計 2,144人
熊本県監獄三池出張所	221人	(明治22年1月1日現在)

次に福岡県・熊本県囚徒および集治監囚徒、就労の推移をあげてみる。

福岡県三池監獄

福岡県囚徒は官営時代から引きつゞき宮浦坑に就労していたが、囚徒使用許可に示されていた本年十一月限りの期限到来とともに全員福岡本監は引揚げた。福岡県では以前から同県の囚人を出役させることにつき、いろいろと論議があったが「三池監獄ハ監舎食物共ニ疏悪ニシテ使役甚タ重キヲ以テ囚徒ヲ挙テ殆ント其役ニ堪ヘサルモノ、如ク 徒テ病者ノ多キ他ノ監獄ノ比ニアラス 而シテ經濟上ニ於テモ毎年八百余円ノ損失ヲ来スノミナラス遠ク二十里ノ外ニ監獄ヲ置キテ吏員ヲ配置シ囚徒ヲ押送スル等其ノ不便一ニシテ足ラス 加之囚徒年ヲ追テ減少シ今来ニ至リテハ当局鉦山局ト約定セル人員ヲ使役スル能ハサル等止ムヲ得サル事情アレハ廿一年度限り之ヲ廃止セント欲スルモ監房不足ヲ告クルニヨリ之カ新築ヲ要スル日子ヲ八ヶ月ト予定シ廿二年十一月限り之ヲ廃止」することになり⁽⁷⁾約定期限満了とともに、明治8年10月以來満14年間継続した囚徒派遣を打ち切った。

熊本県監獄三池出張所

熊本県囚徒は官営時代から引きつゞき大浦坑の採炭作業に出役し、1日の出役数は200余名であったが、囚徒の増員を希望する炭鉦側は熊本県と協議の結果、約350人を収容する監房を新築して、22年4月1日から29年3月31日までの満7年間、300人から400人までを常時、採炭作業に就役させることにした。22年8月から宮浦坑に配置転換されたが、その後さらに増員されて約300人となり、28年9月には400余人、29年11月には500人を超えたが、採炭切羽減少のため、坑内使役の囚徒を350人に制限し、50人を坑外作業に使用することにした。30年1月には恩赦放免によって50人が出獄した。また宮浦坑の切羽減少のため、32年3月、七浦坑に移された。当時七浦坑では囚徒を甲乙の二方に分け、同一坑内で良民鉦夫と同時に就労させていたが、囚徒・良民鉦夫の双方に悪影響を及ぼし、作業上からも戒護上からも不都合なことが多かったので、一方採炭に変更することとし、次のような規約を

結んだ。

「第一条 熊本県放免囚は良民と混同して採炭することを得ず。

第二条 囚徒と良民坑夫は互に坑内より引上げたる後にあらされは決して入坑することを得ず。

第三条 良民坑夫の入坑及引上の際には一定の場所に於て三池炭礦事務所員立会の上熊本県監獄署員の披権を受くへし。

第四条・第五条～省略」

(8)

その後七浦坑の採炭切羽は次第に減少して35年9月には採掘を終らざるを得なくなったので、明治9年4月以来、各県囚徒中最も就労期間が長く、また最も人員も多かった熊本県囚徒は同年10月10日をもって全員熊本本監に引揚げた。明治22年8月から28年12月までの熊本県囚徒の採炭作業就労の状況は第7表のとおりである。

第7表

「熊本県囚徒、明治22年8月以降28年12月迄 採炭使役景況

年 度	採炭人員	屯 数	採炭賃銭	日雇人員	日雇賃銭
22年 8月ヨリ 12月マデ	35,802 ^人	32,695,248 ^屯	3,866,483 ^円	8,516.5 ^人	551,736 ^円
23 年	65,789	75,202,156	8,182,081	21,100.8	1,452,612
24 "	57,974	77,304,636	8,494,154	24,132.2	1,867,320
25 "	55,454	76,559,244	8,225,817	20,741.6	1,625,666
26 "	55,359	78,173,435	6,400,122	24,707.8	1,871,208
27 "	54,352	80,658,026	6,497,409	36,882.2	2,867,708
28 "	51,007	109,270,186	7,802,386	34,500.7	2,455,808
計	375,737	529,862,931	49,468,452	170,581.8	12,692,058

22年8月以前（大浦坑時代）ノ分ハ屯数並ニ金額ハ判明セルモ当時ノ書類不完全ニシテ使役人員不明ニ付8月以前ノモノハ省略ス」 (9)

三池集治監

(明治36年4月1日～三池監獄・大正11年10月1日～三池刑務所と改称)
集治監の囚人は三井移譲後も引きつゞき七浦坑の採炭作業に従事し、1日の出役人員は約1,000人であったが、その後次のように増減している。

「一日平均囚徒出役数	24年8月に勝立坑が採炭を始めたので、
明治27年末 1,138人	同坑の良民坑夫を大浦坑に移し、そのあと
同28年末 1,185人	に七浦坑から選抜した囚人200人を就労
同29年末 1,136人	させたが、29年には130人を増員して
この間 最多1,227人	いる。しかし勝立坑は本監から遠く、護送
最少1,028人	その他に不便なことが多かったので、勝立
同30年末 1,118人」 (10)	出張所開設し本監から400余名を移して 勝立坑に出役させた。

英照皇太后の崩御特赦によって、30年3月末に310人が出獄したのに加え、32～33年にわたり200人が北海道へ移送されて、囚徒数が減少したので、勝立坑就役の囚徒全員を宮原坑に転役させた結果、勝立出張所は廃止された。囚人の使役については官営の方法を引きついでまゝだったので、集治監の要求により次のような契約を締結した。

「契約書

三池集治監拘禁囚を三井鉱山合名会社三池炭礦に使役せしむるに就き三池集治監典獄は三池炭礦事務所長と契約を締結すること次の如し。

一、採炭夫及び日雇夫使役の方法其他賃金等は別に定むる所の規程に依るものとする。

二、人員の増減変更は双方の協議に依り之を定む。但三池集治監の都合により適宜処分することある可し。

三、賃金は日計して日々之を徴集す。但便宜上一ヶ月若くは三ヶ月累計徴集する事ある可し。

四、賃金徴収の告知を受けたときは三池炭礦事務所は速かに納入す可し。

五、三池炭礦事務所は天災地変其他、坑内外の礦業に要する諸器具の破損等人力を以て抗拒す可からざるものにして直接採炭に關係するものの外一切休役せしむることを禁ず。

六、三池炭礦事務所は各服役場は勿論、坑道等は勉めて完全を期し危険の虞なき様注意し且つ衛生百般の事務に就きては最も精密注意するものとす」

出役人員は30年末の1,118人から31年2月には811人と急減したが、⁽¹¹⁾以後年を追ってさらに減少の一路を辿っていた。

集治監在監の囚人が激減したので、31年に典獄、菅井誠美は勝立分監設置について司法省に上申している。それによると、30年の減刑令その他により本監に一棟の空監房ができたので、これを勝立に移転して勝立出張所の規模を拡大し、囚人1,000人を収容する分監を開設のうえ、立地条件や経費等の点で不利な宮城集治監を廃止して、勝立分監をもってこれに代えれば、国費節減、再犯防止等の点で有利であるとの趣旨を強調し、三井側もまた非常に熱意を示したが、遂に実現をみるに至らなかった。

35年10月に熊本県囚徒の引揚げた後は、集治監の囚徒だけが囚人労働廃止の日まで就労をつづけた。

2. 労働環境と労働の実態

官営から三井の経営に移っても、旧鉱山局職員の大部分と労働者および囚人をそのまま引きついたので、労働機構に大きな変化はなかったが、当時、刑罰は犯罪に対する応報であるという応報主義的な考え方が支配的であったから「その目的とする処採炭そのものにあらずして寧ろ囚人苦役の良法を得たるに満するが如」き、懲罰科役を目的とした官営時代の使役方法が急に改まるものでもなかった。

しかし炭鉱側に、政府の庇護の下に囚人を使用させてもらっているという配慮があったことは、団琢磨から福岡県知事にあてた前掲の囚徒出役願などに「囚徒御出役」の文字が再三みられることや、祝祭日に牛肉・糯米・黒砂糖を贈って囚徒を慰労したことなどによっても、その一端をうかがうことができる。

採炭作業が昼夜交代制になったのは明治12年5月、大浦坑に曳揚機が設置され、坑外馬車道や大牟田川水門が完成して出炭増強を要請された結果によるものであるが、囚人も同時に昼夜2交代で出役したものと思われる。22年7月に改正された監獄則ならびに同施行細則によると、囚人の服役時間は第8表のようになっている。しかしこれは一般

「第8表

の監獄における規定で、採炭作業のような特殊作業については「但地方の状況又は監獄の構造に依り内務大臣の認可を経て伸縮することを得」により集治監では1昼夜2交代を実施したものと考える。

	時間		時間
1月	7.00	7月	10.30
2月	8.00	8月	10.00
3月	9.00	9月	9.00
4月	9.30	10月	8.30
5月	10.00	11月	7.30
6月	10.00	12月	7.00

囚人の出退役に当っては途中逃亡のお

(12) 」

それがあるので、昼間だけ護送することにしていたため、第9表のとおり四季にわたって交代時間の変更があり、日の最も短い冬季においては夜間組は入坑時間16時間に及ぶが、昼間組はわずか8時間となり、作業統制上非常に不都合だったが、大正12年の一般鉱夫の3交代実施後これにならって14年9月から3交代制をとった。

(14)

「第9表 三池集治監 在監人動作時間表

内役之部

	1月	2月	3月	4月	5月	6・7月	8月	9月	10月	11月	12月
起床	7時	6時半	6時	5時半	〃	5時	5時半	6時	〃	6時半	7時
喫飯	1時間	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
就業	8時	7時半	7時	6時半	〃	6時	6時半	7時	〃	7時半	8時
午飯	30分	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
罷役	3時30分	4時	4時半	5時	〃	5時半	5時	4時半	〃	4時	3時半
還房	4時	4時半	5時	5時半	〃	6時	5時半	5時	〃	4時半	4時
就寝	6時	6時半	7時	7時半	〃	8時	7時半	7時	〃	6時半	6時
就業時間	7時間	8時間	9時間	10時間	〃	11時間	10時間	9時間	〃	8時間	7時間

採炭夫昼役之部

	1月	2月	3月	4月	5月	6・7月	8月	9月	10月	11月	12月
起床	7時	6時半	6時	5時半	〃	5時	5時半	6時	〃	6時半	7時
喫飯	30分	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
出役	7時半	7時	6時半	6時	〃	5時半	6時	6時半	〃	7時	7時半
午飯	30分	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
罷役	3時	3時半	4時	4時半	〃	5時	4時半	4時	〃	3時半	3時
還房	4時	4時半	5時	5時半	〃	6時	5時半	5時	〃	4時半	4時
就寝	6時	6時半	7時	7時半	〃	8時	7時半	7時	〃	6時半	6時
就業時間	7時間	8時間	9時間	10時間	〃	11時間	10時間	9時間	〃	8時間	7時間

採炭夫夜役之部

	1月	2月	3月	4月	5月	6・7月	8月	9月	10月	11月	12月
喫飯	3時半	4時	4時半	5時	〃	5時半	5時	4時半	〃	4時	3時半
監房掃除	30分	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
出役	4時	4時半	5時	5時半	〃	6時	5時半	5時	〃	4時半	4時
夜食	1時間	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
罷業	3時半	4時	〃	〃	〃	〃	3時半	4時	4時半	4時	3時半
還房	7時半	〃	7時	6時半	5時半	6時	6時	6時半	6時半	7時	7時半
就業時間	10時間	〃	〃	9時間半	9時間	9時間	10時間	10時間半	〃	〃	10時間

(15)

毎日の労働は「指定せられたる作業は如何なる業種のものたりとも決して異存を申立つることなく一意専心之に従事し規定の科程は必ず之を終了せざるべからず」という獄則による厳しいものであったことは勿論である。

(16)

2年5月に七浦坑の汽罐夫を中心とする賃上げ要求の争議が勃発した。

官営時代は労働者に対し非常に圧制的で待遇も悪かったが、三井の経営に移ったので待遇も改善されるであろうという期待を裏切られたことが、その原因であったが、囚徒もこれに捲き込まれて不穏な情勢を示したため、しばらく出役を休止した。同年1月から憲兵を監内に駐在させたことは前記のとおりであ

るが、これは民営移管の過渡期における紛擾・暴動など不測の事態に備えての処置でもあった。

「三池監獄の囚徒が従事する炭坑は、監獄より最近の距離にある宮の原坑に限りて居る、同坑の坑内事業は一切万事、柿色の服装をした一種の鉱夫に依りて、他に類なき「サーベル」の下に監督を受け、最も嚴重なる規律の中に経営されつゝあるのである……此等の鉱夫は何れも重罪囚で、即有期徒刑、無期徒刑など聞くも恐ろしき刑名を負ふた、鎖りつきの剛のもの許りであるが、最早世間の味を忘れて、一種の経験を積んだ連中が多いので、平日の事業は総べて規律の下に行動して至極穩かに稼いでいる、其の稼働に就ては、普通鉱夫と同じく、昼夜二タ方に區別されて居ること勿論であるが、実際の労働時間は日の長短により、最長十時間半、最短七時間半で一ケ年の平均は八時間と七分五厘に当たっている。しかも其の時間は風袋なしの正味許りで、普通鉱夫が十二時間の入坑よりも、割合に多くの仕事を為すことになって居るので、其の成績は彼等に劣ることはない……即採炭夫一人一日平均採炭高が六函四合に當て居る、即二屯八合に相当するのである、之を筑豊のソレに比較すれば、殆んど二倍以上に當るかと思はるゝ」。⁽¹⁷⁾炭層の賦存状態がきわめて良好で、設備の優秀な三池炭鉱と、薄層で硬の多い筑豊の諸炭鉱とは条件に差があるので一概に比較はできないが、採炭囚の能率は一般鉱夫に劣っていなかった。第10表の示すとおり三池炭鉱では「明治6・7年頃ノ採炭夫一人当リノ出炭能率ハ約0.66屯、三井ガ松下グラ受ケタ22年ハ1.05屯デ32年ニ2屯ニ達シタガソレ以後大正13年頃マデハ殆ンド上昇ヲミナカッタ」がこれと比較しても採炭囚の能率は一般労働者のそれを上廻っている。⁽¹⁸⁾

1863年の英国政府の調査によると「懲役に処せられた者から要求される労働量は、普通の農村労働によってなされる労働量の約半分である」と資本論が述べているように、⁽¹⁹⁾自発的に働く意欲のない囚人労働の能率は低劣なのが普通であるが、三池炭鉱の場合は一般労働者の能率に比べて劣ってはいなかった。

採炭夫の稼働日数は他の職種に比べて一般に少いが、特に九州地方では、甚

だしの場合「一日就業すれば一日休業する風」があり、第 11 表のように 1
 (20)
 ケ月の平均稼働日数は 17 日から 22 日となっているが、三池の稼働日数は 18
 日にすぎない。しかるに囚人の場合は病気と、定められた免役日以外は休むこ
 とを許されず、そのうえ嚴重な監督下における長時間・高密度の半奴隸的な強
 制労働であり、しかも出稼率が非常に高いので、その出炭量は、はるかに良民
 採炭夫を凌駕していた。

第 11 表

「主要炭鉱採炭夫稼働日数

第 10 表

「 採炭夫能率比較

(明治 39 年頃)

年 次	集治監囚徒	良民鉱夫	某石炭山
明治 22 年		1. 05 ^屯	
" 23 年		1. 02	
" 24 年		1. 07	
" 25 年		1. 23	
" 32 年		2. 10	
" 34 年		2. 19	
" 42 年	2. 46 ^屯		
" 43 年	2. 40		
" 45 年	2. 14		
大正 2 年	2. 44		
" 4 年	2. 25		1. 52 ^屯
" 6 年	3. 06		1. 87
" 8 年	3. 97		1. 57
" 10 年	4. 81		1. 47

炭 鉱 名	1 ケ月稼働日数
夕張第一	20 ^日
空知	22
幌内	24
大之浦	19
大辻	18
新入	20
明治	20
鯉田	21
二瀬	17
山野	20
忠隅	22
上山田	18
田川	18
赤池	22
三池	18

(註)

(21) 」

(22) 」

1. 集治監囚徒の能率は「三池炭礦に於ける囚徒採炭の由来」より
2. 良民鉱夫の能率は「三池鉱業所沿革史」保安課 3 より
3. 某石炭山の能率は「日本鉱業発達史」下巻 419 頁 ~ 420 頁による

エンゲルスがいつているように19世紀中頃のイギリスの炭鉱では「石炭は重さで売却されるに反して、労働者に対する賃金は多くの場合量によって計算される。而して労働者は彼の桶に石炭を一杯充さなければ賃銀は貰えない。然るに余分のものに対しては總一文も支給されない。桶の中に一定量以上の砂利があった場合には——それは労働者よりも炭層の性質に関係することが多い——全部の賃金が貰へないどころか、罰金に処せられる」のであるが、三池炭鉱でも検炭の規程は厳しく囚徒の採炭した石炭は坑口で監獄官吏・炭鉱職員立会の上、量目の過不足・粉炭の混合度合・悪石の混入度合などを検査して引渡すために「採炭引渡規約」を定めているが、23年11月実施のものによると「塊炭中に粉炭の混淆を検査するには曲尺一寸角目の篩を以て篩い分け其目に止りたる部分を塊とし、止らざる部分を粉」と定め総函数の $\frac{1}{10}$ 内外につき、各切羽が不公平にならぬよう検査する⁽²⁴⁾。混淆歩合は $\frac{10}{100}$ 未満は容赦するが、 $\frac{10}{100} \sim \frac{15}{100}$ の場合はその現量を、 $\frac{15}{100}$ 以上はその2倍を引去り、その残りについては粉炭担当の賃金を支払う。また悪石の混淆歩合 $\frac{3}{100}$ 未満はその現量を、 $\frac{3}{100}$ 以上はその2倍を引き去る。さらに白灰付き・錆付き・雑物混入などの場合は、その函に限って賃金を支払わないことになっている。この検炭規程は、その後数回にわたって改正しているが、その都度量目不足・悪石混淆に対する賃金引去率を厳しくしている。

こうした監視・監督下における採炭労働が非常に苛酷で厳しいものであったことはいうまでもないが、監督者の指揮に従い、割当てられた科程を完了し能率をあげさえすれば、割合のんびりした面もあったようである。

「囚徒の坑内作業は囚徒に取りては束縛なき自由の天地であった。坑内は温くて始終裸体にて囚衣も脱ぎ棄て得られ、煙草も私かに喫うの機会もあり、且賃金収入もあって囚徒は寧ろ入坑を喜んで居た」というように、坑内での喫煙も黙認されていたが、25年5月から「漸次坑区拡大につれて危険の恐れある」ということで厳禁した。

大正中期、我が国現代行刑の父といわれる正木亮が囚人労働状況巡閲のため

三池の坑内に入った時「そこは有名な地底労働の行はるゝところ……僕は清水君につれられてそこの囚人の働いている炭坑に這入る。たて坑二千尺、カン(註、清水精四郎典獄)テラをともし暗路をたどる……坑内の囚人は禪もして居ない。ラムネを飲んで居る、菓子を食べて居る。矢張時々落磐にやられる虞があるだけに御馳走は食へる。感化上よくありませんねと清水君にたづねると只ニヤッとするだけだ」。本省の巡閲官の前で典獄が公然とこうしたことを許しているところを見れば「囚徒は寧ろ入坑を喜んでいた」というのもある程度事実であろう。

年代は溯るがこれを26年頃の幌内炭礦の状況と比べてみる。「有害危険なる坑内に入るものは好んで死地に進むものと云わざる可らず、普通の感情より云はゞ該所に發遣せしむるの命を受けたる者は屠所に就くの思ひあるべき筈なり。而るに事の実際は之に反して囚徒の中には寧ろ之を喜ぶ者多き傾向あるは何ぞや、該炭坑は坑中の面積広からずと雖も支道の数頗る多く延長すれば其距離十三里の多きに達し採炭一日を加ふれば若干を増加す。十五里二十里に至るも又計る可らざるなし。今仮に五十人の戒護者を置くとするも八丁に一人弱の割合にして一個の手燭は八丁を照らすに足らず、況んや坑口に十分の戒護者あるのみにして内を巡回する者極めて僅少なるに於てをや爰を以て囚徒の為さんと欲する所は大抵之を為す事を得」る状態で、その為さんとする事の第一は逃走であつた。当時幌内炭鉱では水準以上の所あるいは地下の浅い所を採掘していたので、鶴嘴の先端に木の根の現われるのをみて地表の近いことを知り、外部に向つて逃げ道を掘り進んで逃走したことは先にあげたとおりである。

第二は「喫烟並に美食を為すの機会ある是なり。該炭坑内には囚徒の傍に良民の礦夫常に来往す、礦夫が此の如き物品を贈与、交換売買する如き不正の所為なきは我輩之を信ずと雖も屢々往復する際には遺失若くは置忘るゝ事なしとは断言する克はざるのみならず、竊取、奪掠の途に長けたる囚人は之を獲るの悪手段を廻らす事あるべし。此の如くにして制規以外の美食を喰ひ烟草を喫し処罰を受けたる者少からずといふ(後には良民を交へず)」さらに第三は「飲酒なり曾て坑内に出入する坑夫にして荷車の下に酒器を装置し、内に運ばんと

するものあるを発見して相当の処分をなしたこともありと言へば、現時此の如き曲事の跡を断ちたるや我輩之を疑わず而れども囚徒は坑内に於て自ら酒を醸すの道を知れり。即ち飯米幾分を貯蓄し其相当の量を得るに至りて坑内適宜の岩窟を鑿穿し之に米を投じ藺を掩ひ火を加えて醸酵せしむといふ………炭坑と称するものゝ内には時に酒、煙草、食物等を貯蔵するあり現に昨年⁽²⁹⁾の末にも貯蓄蔵一個を発見せりといふ。此の如く美食に腹を充て煙草を喫し酒を飲み酔に乘じて何事をかなす曰く賭博曰く猥褻の所行是なり、賭博は金銭を有せざるも一日一屯の定役外に採掘したる炭を賄し、勝ては他人の勢力の結果を以て己の定役の額に充たして官吏を欺き暇あれば酒の製造をもなさん猥褻の所行をも為さん、終に炭坑内は規律厳肅なる監獄に比して彼等の為に桃源仙境の想あるに至らしめ、無頼不治且つ刑期の遼遠なる囚徒は死を冒すも之に行かんことを望み、悔改自新の途に上りて自ら身を重んずるの輩は屠所に就くの歎をなすの事情あるものゝ如し」とのべ「爾後一年余遂に該炭坑に於ける囚徒の外役は全廃されたるを以て再び既往を喋々するの要なし、独り将来之に類似の起業あらば亦多少の参考となるべきを以て全文を存す事となせり」といっているが、こうした弊害と社会の非難が原因となって、27年12月限りで幌内炭礦の囚人使用は廃止された。⁽³⁰⁾

三池炭鉱は幌内炭礦と比べて、その地理的条件・坑内条件の差によるものか、あるいは警戒が嚴重であつたためか逃走の事例は少く、明治16年12月の、集治監典獄から内務郷への景況具申書に「入監日猶浅く業猶熱せざるの間は採炭の労役に堪へざるの状況あり動もすれば窃に逃亡を謀り或は暴行脅迫して逃走を遂げんとする等の事時々有之を以て倍々戒護を厳にし且朝夕懇篤説諭を加へ候処八月己未頃に囚情平穩に帰し」て作業に勉励したとあるが、33年5月7日、七浦坑就労中の囚徒6名が宮浦坑との間の遮断壁と仮張を破壊して逃走したことや、明治末年に4人の囚人が地下道を掘って脱獄し、その中の1人が後年、長崎地方裁判所の判事になって問題となつたことくらいしか資料が見当たらない。⁽³²⁾

坑内作業はその性質上、落磐・側壁崩壊・坑内出水・ガス炭塵爆発など不測の災害が多く、しかも坑内事故は死亡あるいは重傷をとまなうことが非常に多い。現在でも炭鉱では坑内災害が多いが、安全管理の不十分だった時代においては、事故にとまなう死傷は坑内労働者の宿命とさえいふべきものであった。

特に囚人は「彼等は薄暗き獄中に起臥し定規の時間にその業に就くべく獄門を出て始めて天日を拝するのである。然もその日光に照らさるゝは僅か五分十分で又直ちに暗黒の地下数百尺に赴くのであるから新鮮なる大気に呼吸するのは僅か小時間」というように、非衛生的な獄舎に拘禁されて粗食をとり、坑内に入⁸³っては高温多湿の作業場で炭塵にまみれながら、長時間、重労働に従事するから事故による死亡・負傷や伝染病その他の疾患に罹る率が非常に高かった。明治33年に三池集治監の医員、菊池常喜が囚人の坑内使役は有害であるから廃止すべきであるという意見書を提出しているの、それによって死傷病の状況分析してみる。

「第12表

一般死亡人員及囚員に対する死亡比例

明治29年～明治31年

年次	人員	囚人1日平均人員	死 亡 人 員	同上百分比率
明治29年		1,908人	114人	5,975
" 30年		1,481	85	5,739
" 31年		1,466	72	4,911

(註) 30年から比率が減じているのは31年1月の大赦出獄によるもので死亡率そのものが低くなったのではない。 (84) 」

死亡率は29・30両年とも6%に近く、31年も4.9%強となっているが、囚人の死亡率は英国が $\frac{9}{1,000}$ 入で最も少く、これに比べ三池集治監の死亡率は非常に高い。

現在三池集治監では囚人総数の約 $\frac{2}{3}$ が採炭作業に従事しているが、特に身体

強壮なものを選び高令者・虚弱者・不具者等は内役に服させているにもかゝらず、坑内就労者に死亡が多いのは採炭作業そのものに原因がある。呼吸器系統の病気は内役では、死亡者10人中2人にすぎないが、採炭夫では死亡者39人中25人の多きに達している。

「第13表

「第14表

内役、採炭死亡比較表 (自 32年1月1日
至 同 9月末日)

業務上の事故死亡者

	内 役	採 炭
肺 結 核	2	16
肺 炎		3
気 管 支 炎		6
腸 加 答 児	3	2
腎 臓 炎	3	2
心 臓 病		2
外 傷 性 脊 髓 炎		1
胃 潰 瘍		1
脳 溢 血	1	
精 神 病	1	
坑 内 圧 死		6
合 計	10	39
出役1日平均人員	404	1,003
右平均人員に対する死亡者 百分比	2.48	3.89

(自 31年1月～32年9月末)

明治30年	5人
" 31年	9
" 32年	6

(36) 」

また事故死亡者は第14表のとおりであるが

長期徒刑囚は「出獄を楽しむ日遠く、加之其性慥悍従て己れの生命を重ずるの念慮に冷淡にして却て危険を冒すを屑しとする」⁽³⁷⁾ような傾向があるのに加えて、監督者の注意が不十分であ

(35) 」

るため事故死亡者が多い。

年代は少しさかのぼるが幌内炭礦の事故死亡者は第15表のとおりである。

次に死亡数および死亡率について空知監獄と比較してみる。空知監獄の囚人は、ほゞその半数を幌内炭礦に出役させていたが、27年にこれを打切っているので、同年代の死亡率を正確に比較することはできないが、マラ

「第15表

幌内炭礦業務上の事故死亡者

明治20年	24人
" 21年	19
" 22年	13
" 23年	20
" 24年	9

(38) 」

リヤ性熱病流行のため死亡率の特に高かった20年以外は、毎年三池より低くなっている。

「第16表

空知監獄年度別死亡数及び死亡率

年 度	在 監 人 員	死 亡 人 員	死 亡 率
19年	2,003人	83人	4.14%
20年	1,966	265	13.48
21年	2,163	76	3.51
22年	2,975	83	2.78
23年	3,048	106	3.47
24年	2,630	98	3.73
25年	2,549	70	2.74
26年	2,502	46	1.84
27年	1,953	32	1.63
28年	1,713	44	2.56
29年	1,561	16	1.06
30年	1,001	14	1.39
計	26,064	943	3.66

(註. 死亡者943名は、全道囚人死亡者数2,064名の45.1%の(39)高率である。)

さらに第17表によって全国の各集治監と比較してみる。

「17表

明治26年～30年全国集治監死亡者

	5ヶ年平均 1日の在監人員	5ヶ年平均 死亡人員	在監人1,000人中 死亡者の割合
北海道集治監	6,399人	103人	16.1人
東京 "	1,400	36	25.7
宮城 "	1,135	59	51.3
三池 "	1,730	93	53.7

これを見ると三池の死亡率がとび抜けて高くなっているが、その原因はすべて採炭作業に原因がある。

また採炭囚の年令別死亡数は第 18 表のとおりであるが、内役に比べて壮年層の死亡者が多いのも採炭作業がその原因となっている。

「第 18 表

内 役 採 炭 死 亡 年 令 別 表

明治 32 年 1 月 1 日～9 月末日迄

年令別 就業別	20 以上	30 以上	40 以上	50 以上	60 以上	合 計
採 炭	5	21	9	4	0	39
内 役	2	0	2	2	4	10
合 計	7	21	11	6	4	49

(41) 」

また囚人総数に対する休役患者の比率は平均 5/100を下らないが、これほど高い傷病率は採炭作業以外にはみられない。さらに坑内での負傷や、坑内作業が原因となった疾患の、患者総数に対する比率はともに 15/100以上にのぼっている。その負傷は軽いものも多いが、中には四肢を損傷して不具者となった、負傷が原因で死亡するものもあり慄然にたえぬが、これらはすべて採炭課役によって引き起されるものであるから、囚人の坑内就労を廃止せよと菊池医師は強調した。

以上のごとく坑内事故による負傷や、採炭作業が原因となった疾患も多かったが、採炭作業は他に比較して工銭が高いこと、食事が良いこと、監房の内役に比べて、坑内の規律が割合にゆるやかであったこと、一定のノルマを果せば奨励品として食べものを貰えることなどから、多少の故障はおかしてでも出役をつづけた結果、再起不能となるようなこともあったようである。採炭労働は、他のいかなる仕事にもまして、エネルギー消耗量の高い重筋労働であるから、その消耗を補うために、採炭夫は他のことは措いても食事だけは量・質ともに特別の配慮をするものである。

当時の食事の状況をみるために 27 年当時の集治監 1 旬の献立表を掲げてみる。

三池集治監明治27年11月21日～30日、1旬の献立表

区 別	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日		計	平 均
	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜		
朝 食	品日給額	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左	同 上		
	味噌 15匁	同 左	同 左	同 左	同 左	味噌 5匁	味噌 15匁	同 左	同 左	同 左	同 上		
	唐菜 20匁	大根 20匁	唐菜 20匁	大根 20匁	唐菜 20匁	同 左	大根 20匁	唐菜 20匁	大根 20匁	唐菜 20匁	同 上		
1 囚 菜 代	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	1匁4厘	1匁4毛
	1匁5毛	同 左	同 左	同 左	同 左	8 毛	1匁5毛	同 左	同 左	同 左	同 左	1匁4厘	1匁4毛
	味噌 1匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁
星 食	味噌 1匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	味噌 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁	胡椒 5匁
	胡椒 25匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
	味噌 12匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
外 役 食	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
1 囚 菜 代	1 匁	1匁1毛	1 匁	8 毛	1 匁	1匁1毛	1 匁	4 毛	1 匁	7 毛	9匁1毛	9匁1毛	9匁1毛
	唐 菜	里芋 60匁	牛肉 9匁	唐芋 70匁	牛肉 9匁	里芋 60匁	唐芋 70匁	牛肉 9匁	マミ 1匁	唐芋 70匁	唐芋 70匁	唐芋 70匁	唐芋 70匁
	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
1 囚 菜 代	2匁9毛	4匁2毛	4匁6毛	2匁9毛	4匁7毛	4匁2毛	2匁9毛	4匁6毛	8 毛	2匁9毛	3匁4厘	3匁4厘	3匁4厘
	5匁4毛	6匁8毛	7匁1毛	5匁2毛	7匁2毛	6匁1毛	5匁4毛	6匁5毛	3匁3毛	5匁1毛	5匁8厘	5匁8厘	5匁8厘
	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
外 役 食	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
	味噌 10匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁	大根 23匁
1 囚 菜 代	1匁2毛	同 左	1匁1毛	8 毛	1匁1毛	1匁2毛	1匁1毛	同 左	1匁2毛	1匁1毛	1匁1毛	1匁1毛	1匁1毛
	生魚 30匁	同 上	同 上	同 上	同 上	生魚 15匁	生魚 30匁	生魚 30匁	生魚 30匁	生魚 30匁	生魚 30匁	生魚 30匁	生魚 30匁
	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
有 囚 貴 表 菜	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
1 囚 菜 代	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
	7匁2毛	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上

(42)

追って献立表に記載する一囚菜代価格は時価により予算せしものに有之、又十月の菜代決算は左の通り
 一、一囚一日の菜代料金は八匁六毛八〇〇八、一、特別菜代一回金九匁八毛二四四

朝食は10間をととし野菜の味噌汁で、平均1厘4毛、昼食は弁当持参で、野菜に少量の鰯などを添えたもので、平均わづかに9毛1、夕食はいくらか良くなって平均3厘4毛7となっていて、1人1日の菜代は5厘8毛1である。「三池監獄へ監舎・食事共ニ疎悪ニシテ」とあったように副食物の質・量ともにきわめて粗末である。

壺食は出役日は、米4・引割麦または粟6の割合で7合、休日は同じ割合で4合となっている。それでも普通の監獄に比較すると可成り良くなっている。

- (1) 土屋喬雄「続日本経済史概要」 124頁
- (2) 「男爵 団琢磨伝」 240頁
- (3) 「三池鉱業所沿革史」庶務課4
- (4) 同 上
- (5) 同 上
- (6) 同 上
- (7) 「明治21年福岡県議会決議録」
- (8) 「三池刑務所沿革」其の一
- (9) 同 上 其の一
- (10) 同上により作成
- (11) 「三池刑務所沿革」其の二
- (12) 「日本近世行刑史稿」下、653～654頁により作成
- (13) 同 上 1263頁
- (14) 「三池炭礦における囚徒採炭の由来」
- (15) 同 上
- (16) 「日本近世行刑史稿」下、653頁
- (17) 高野江基太郎「日本炭礦誌」 227頁
- (18) 「三池鉱業所沿革史」保安課3
- (19) 「資本論」(向坂逸郎訳)第一巻 852頁
- (20) 高野江基太郎「筑豊炭礦誌」 325頁

- (21) 第 10 表に付記
- (22) 「鉱夫待遇事例」34～41 頁により作成
- (23) 改造社版、マルクス・エンゲルス全集 第三巻 267 頁
- (24) 「三池刑務所沿革」其の一
- (25) 「男爵 団琢磨伝」
- (26) 正木亮「行刑の変遷を調べて」 302～303 頁
- (27) 岡田朝太郎、前掲書、日本近世行刑史稿(下) 1259 頁
- (28) 同 上 1259 頁
- (29) 同 上 1259～1260 頁
- (30) 同 上 1260 頁
- (31) 「三池刑務所旧記」
- (32) 武田武久「三池監獄を探る」刑政、昭和47年10月号
- (33) 高野江基太郎「筑豊炭礦誌付三池炭礦誌」 528 頁
- (34) 「三池刑務所沿革」其の一
- (35) 同 上
- (36) 同 上
- (37) 同 上
- (38) 田中修、前掲書 105 頁より
- (39) 同 上
- (40) 「三池刑務所沿革」其の一
- (41) 同 上
- (42) 「日本近世行刑史稿」下、1024～1025 頁

第四章 賃 金

賃金は労働力という商品の価格であり、その価格の大きさは労働市場における需給関係をとおして形成されるものであるが、囚人の場合は賃労働一般の場合のように、労働需給関係を反映するものではない。したがってこの場合賃金

とよぶのは正しくないが、便宜上賃金という一般的名称を使用することにする。

囚人の採掘した石炭は、採炭受渡規程により、坑口で量目の過不足・粉炭や硬の混肴の度合い等を嚴重に検査して引渡したが、この規程はその後しばしば改正され、37年4月1日実施のものから1函の定量を750斤(0.446吨)としている。

受渡しを終った石炭に対しては、その出来高によって工銭が支払われるのであるが、囚人に支払われる工銭については、彼等に課された定役の報酬として当然受取らるべき権利的なものであるか、あるいは国家による恩恵的なものであるかについて、以前から議論の分れるところであった。

囚人が定役に服するのは刑罰によるものであるから、その報酬とみなされる工銭も、その全額を国庫に収入し、彼等に与える必要はないが、全然支給しないと、将来への希望を失い、定役に精励しなくなるという懸念などから、工銭の幾分かを与えて、これを積立て出獄後の生業の資に当てさせることにより、再犯を防止するというのが工銭支給の理由であった。明治32年の監獄則の改正で、囚人の行状を工銭計算の基準の一つに取入れたことによって、いくらか賞与金的性格を帯びるようになったが、さらに41年の監獄法の制定により賞与金制度が採用されて、囚人の作業収入の国家帰属が明確になり、囚人の作業所得権を否定し、従来の給与工銭制度を改めて、作業賞与金制度として現在に至っている。

(註) 現行、監獄法

＜第27条 作業ノ収入ハ総テ国庫ノ所得トス

③ 作業賞与金ハ行状、作業ノ成績等ヲ斟酌シテ其額ヲ定ム

第28条② 前項ノ手当金ハ釈放ノ際本人ニ之ヲ給シ死亡ノ場合ニ於テハ死亡者ノ父、母、配偶者又ハ子ニ之ヲ給ス＞

囚人採炭夫の工銭は当時の資料が少いのと、出来高制であるために正確な数字が掴みにくいが、断片的な資料によって検討してみる。

集治監がはじめて囚人を三池炭鉱に出役させたのは16年5月であるが、同

年 1 2 月、典獄が内務省に具申した「囚徒使役上ノ景況具申」によると、集治監開設に備えて 1 5 年に予算を作成した際、鉱山局が決定した採炭賃金は、平均、採炭 1 函 10 銭 8 厘、粉炭 1 函 6 銭 6 厘であった。しかるに不況により炭価が下落しつゞけたということで、1 5 年 1 1 月、1 6 年 1 月、同 4 月と、まだ開設以前に 3 回も採炭賃金を変更減額しているのに、本年 11 月さらに 3 割を減賃された結果、塊炭 1 函 5 銭 3 厘 9 毛、粉炭 1 函 2 銭 8 厘 3 毛となった。世情一般が不景気なので止むを得ないが、工銭の下落にもかかわらず、他の諸物価はその割に低落しないので、予算が大きく狂い 運営上非常に困っている。この分では、いかに囚徒を督励使役しても到底、最初の予定どおりに衣食住の費用を弁償することは無理であると訴えているが、この中にはじめて囚人が出役した 1 6 年 5 月から 1 0 月までの囚人 1 人当りの平均工賃をあげている。

「第 2 0 表

1 6 年	5 月	5. 5 7
"	6 月	5. 5 9
"	7 月	6. 5 6
"	8 月	6. 1 4
"	9 月	7. 0 6
"	1 0 月	6. 3 1

(2) 」

明 治 1 3 年 4 月～1 4 年 6 月の長崎県懲
役場の収支状況表によると、第 2 1 表のように

「第 2 1 表

傭工賃収入	11. 5 8 4 円 4 2 銭 5 厘
1 ヶ年延人員	7 4, 4 6 5 人
1 日 1 人収入高	1 5 銭 5 厘 5 毛 6 8 7 2 1 8

(3) 」

1 人 1 日の平均は 1 5 銭 5 厘 5 毛余 となっている。

諸条件が異なるので双方を一概に比較できないが、集治監囚徒の工銭は異常に低くなっている。これは引きつゞく採炭賃金の減額と、就労早々で採炭作業に習熟せず、作業能率が上らなかった結果によるものと考えられる。

三井移管後の 2 2 年から 2 8 年までの工銭は第 2 2 表のように、時に高低はあっても 1 6 年当時に比較して大分上昇している。

これを同時期の幌内炭礦囚徒の工銭と比較してみると、一・二の例外はあるが幌内は採炭夫・日雇夫とも三池よりも低くなっている。

「第 2 2 表

熊本県監獄囚徒の 1 人当り賃銭の推移

年 度	1 人当り 採炭夫賃銭	1 人当り 日雇夫賃銭	年 度	1 人当り 採炭夫賃銭	1 人当り 日雇夫賃銭
明治 22 年	10. 錢 780	6. 錢 478	明治 26 年	11. 錢 561	7. 錢 573
" 23 年	12. 437	6. 884	" 27 年	11. 954	7. 775
" 24 年	14. 652	7. 738	" 28 年	15. 316	7. 118
" 25 年	14. 834	7. 838	平 均	13. 166	7. 440

(4) 」

「第 2 3 表

幌内炭礦坑夫 1 人 1 日平均賃金比較

	1 9 年	2 0 年	2 1 年	2 2 年
坑夫 { 良民	33. 錢 8	27. 錢 1	29. 錢 5	41. 錢 5
囚徒	9. 1	6. 6	7. 3	7. 2
人夫 { 良民	31. 6	26. 5	23. 0	19. 5
囚徒	10. 7	3. 9	5. 9	7. 6

(5) 」

また三池炭鉱囚人の工銭は良民鉱夫のほゞ $\frac{1}{2}$ 程度が普通であるのに、幌内炭礦では両者の差が非常に大きくなっているが、これは同礦における囚人労働力収奪の激しさを端的に示すものである。

三池炭鉱では、運炭坑道から採炭切羽までの距離 1 2 間を基準として一部といい、さらに普通 1 0 間を増す毎に 2 部・3 部と区分し、その距離に応じて炭函 1 函の工賃を定めている。炭函 1 函の重量は、はじめ約 7 5 0 斤 (0. 4 4 6 屯) であったが大正 8 年 3 月 8 0 0 斤に改正している。

鉱夫は^{ひとさき}一先 4 人として、2 人を先山 (採炭) 2 人を後山 (運炭) とするのが普通であるが、距離に応じ一部を加える毎に、運炭のための後山 1 人を増すのを例とした。

三井と熊本県が 2 2 年 3 月に締結した規約に「採炭囚の賃金は目下履行する

元鉱山局定めの賃金表による。尤も其増減を要するときは、独り本監受得の便否に関せず他の監獄囚徒の賃金と異なる様互に協議の上更正を要す。但受取切羽の善惡により特に賃金の更正を要する場合は本段の限りにあらず」とあるが、次の第 2 4 表の※が、元鉱山局定めの官営時代の 1 函の工錢であるが、その後も石炭市況の変動に応じて、しばしば改正している。

「第 2 4 表

囚徒採運炭工錢改定表（炭函 1 函の工錢）

部数	距離間数	※ 官 営 時 代 最後の工錢	24年4月1日 改 正	25年4月1日 改 正	26年4月1日 改 正
一部	1 2 間迄	錢 4. 7 5 7	錢 5. 1 0 0	錢 4. 5 9 0	錢 3. 6 7 0
二部	2 2 間迄	5. 2 5 7	6. 0 0 0	5. 4 0 0	4. 4 0 0
三部	3 2 間迄	5. 7 5 7	6. 9 0 0	6. 2 1 0	5. 1 4 0
四部	4 2 間迄	6. 2 5 7	7. 8 0 0	7. 0 2 0	5. 8 8 0
五部	5 2 間迄	6. 7 5 7	8. 6 0 0	7. 7 4 0	6. 6 0 0
六部	6 2 間迄	7. 2 5 7	9. 5 0 0	8. 5 5 0	7. 3 4 0
部数	距離間数	30年9月1日 改 正	37年4月1日 改 正	大正6年4月1日 改 正	同8年4月1日 改 正
一部	1 2 間迄	錢 4. 0 0 0	錢 3. 8 0 0	錢 5. 0 0 0	錢 8. 5 0 0
二部	2 2 間迄	4. 8 0 0	4. 5 0 0	5. 8 0 0	9. 5 0 0
三部	3 2 間迄	5. 6 0 0	5. 2 0 0	6. 6 0 0	10. 5 0 0
四部	4 2 間迄	6. 4 0 0	5. 9 0 0	7. 4 0 0	11. 5 0 0
五部	5 2 間迄	7. 2 0 0	6. 6 0 0	8. 2 0 0	12. 5 0 0
六部	6 2 間迄	8. 0 0 0	粉、塊炭の区 別を廃す、10 間を増す毎に 金7厘宛を増加	10間を増 す毎に 金8厘を増 加	10 間を増 す毎に 金1錢を増 加

（註）（1） 1 0 間を増す毎に一部を進め塊炭 1 函に付金 8 厘、粉炭 1 函に付金 4 厘を増加す。

（2） 粉炭は塊炭の半額と為す故に粉炭 2 函を以て 1 函に換ふ。

（7） J

24年に改正したものを、25、26年と炭況不振を理由に引下げた際、集治監は「数度の減給は誠に應じ難き儀に候得共貴社の御困難も洞察致候に付」⁽⁸⁾止むを得ずということで減額を承諾している。

また高温の切羽での作業に対して、大正14年9月から次の標準によって部数を増している。

「華氏 90度以上 一部 これは、さらに昭和5年に改正されている。
同 95度以上 二部 以上の基準工銭の外に坑道の掘進が、特に急を
同 100度以上 三部」 要する場合は急掘規程を設けて、特別に工銭を
(9) 」 増額し「身体強健でよくその業に勉勵するもの」
を選抜して就役させた。

これは27年10月にはじめて実施され、掘さくの幅10尺、高さ6尺ないし8尺以内とし、連続1週間に30尺以上の掘進を最少限としているが、実際は第25表のとおりである。

「第25表

1週間の延尺	27年10月制定 当時のもの	大正8年4月 改正のもの
30尺～35尺	1. 00 銭	1. 80 銭
35尺～45尺	1. 25	2. 10
40尺～45尺	1. 50	2. 60
45尺～50尺	2. 00	3. 40
50尺～55尺	2. 50	4. 60
55尺 以上	3. 20	5. 90

(註) 27年以来、
数回にわたり改
正されたが特に
大正8年改正の
ものから大幅に
増額されている。

(10) 」

急掘作業には良民鉱夫も就労したが、一定数がまとまり、命令一下、出役できるので、囚人の方が就労の機会が多かったようである。

採炭夫以外は日給で、次のように定額を定め採炭夫同様、炭況の推移に応じて増減しているが、次の第26表および第27表によって、その変遷の概略をあげる。

「第26表

囚徒雇工賃改定表

職 名	25年3月 以前のもの	25年4月1日 改 定	業 名	30年9月 改 定
	錢	錢		錢
運 搬 夫	14.000	12.600	機 械 方	12.000
機 械 方	10.000	9.000	一等日雇夫	12.000
雑 役	7.200	6.480	二等 "	10.000
九 等 日 雇	10.800	9.720	三等 "	8.000
十一等日雇	8.400	7.560	石 工	14.000
十二等日雇	7.200	6.480	大 工	14.000
鍛 冶 夫	11.000	9.900	特 殊 棹 取	12.000
"	10.000	9.000	油 方	12.000
"	8.000	7.200	疏 水 夫	10.000
特 殊 棹 取	12.000	10.800	掃 除 夫	12.000
油 方	12.000	10.800	門 番 夫	7.000
油 方 補 助	7.200	6.480	馬 丁	12.000
疏 水 夫	8.000	7.200	馬 飼 夫	13.000
門 番 夫	6.000	5.400	一等鍛冶工	15.000
撰 炭 夫	1函に付 0.100	1函に付 0.090	二等 "	14.000
棹 取 賃	" 0.360	" 0.324	三等 "	13.000
鍛冶夫 増賃	1人に付 2.600	1人に付 2.340		
日雇夫 増賃	" 1.200	" 1.080		

職 名	大正3年7月16日改正					大正6年4月1日改正				
	1等	2等	3等	4等	5等	1等	2等	3等	4等	5等
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
支 柱 夫	23	21	19	17	15	25	23	21	19	17
先山日雇	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
後山日雇	22	18	16	14	12	22	20	18	16	14
石 工	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
馬 丁	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
棹 取	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
大 工	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
鍛 冶	22	20	18	16	14	24	22	20	18	16
運 転 手	25	22	20	18	16	27	25	22	20	18

職 名	大正 8 年 4 月 1 日改正				大正 14 年 9 月 6 日改正			
	1 等	2 等	3 等	4 等	1 等	2 等	3 等	4 等
	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢
支 柱 夫	42	38	34	31	58	52	47	43
先山日雇	40	36	33	30	55	50	46	42
後山日雇	48	34	30	27	52	47	43	38
石 工	40	36	33	30	55	50	46	42
馬 丁	40	36	33	30				
棹 取	40	36	33	30				
大 工	40	36	33	30	55	50	46	42
鍛 冶	40	36	33	30				
運 転 手	47	40	35	33	64	55	48	46

(11) 」

明治 41 年当時の 囚人の賃金は「 去る四月の統計によれば、採炭夫一人一日の平均が三十錢三厘四毛余で、其他の鉦夫が平均十四錢六厘三毛余に當って居る、之を普通鉦夫の賃錢に比すれば、其の廉なること無論驚く許りであるが、更に之を同監獄に於ける他の囚徒に比較すれば、又驚く許りの高価である、鉦夫外の囚徒の賃錢は一日平均十二三錢を通例とするので前記採炭夫以外の鉦夫の賃錢でも、既に例なき高賃で、採炭夫に至っては、全国各地の囚徒中、飛び抜けた最高賃錢であるといふことである、蓋し彼等が科程以上の労働に対しては又特に工賃の七分を彼等の所得とする」ことを許されていた。

41 年における三池炭鉦良民鉦夫の平均賃金は採炭夫 78 錢、職工日雇 50 錢であるが、これを上記の囚人採炭夫の 30 錢 34、採炭夫以外の 14 錢 63 と比較すると、採炭夫が 39%、採炭夫以外はわずか 29%にすぎない。第 27 表は三池集治監の使役延人員と賃金調であるが、42 年下期における採炭囚の平均賃金 31 錢 6 厘、総人員 22 錢 7 厘と第 28 表の同年度、全国監獄囚人の平均賃金を比較すると、三池集治監の賃金をはるかに高くなっている。

「第 27 表

三池集治監、囚徒使役人員ト賃金調（明治 42 年下期以降）

年 次	延 人 員		賃 金		1 人当り平均賃金	
	採運炭夫	総 人 員	採運炭夫	総 人 員	採運炭夫	総人員
明治 42 年	38,988 ^人	139,397 ^人	12,320.208 ^円	31,643.119 ^円	0.316 ^円	0.227 ^円
" 43 年	40,865	136,564	13,812.370	32,639.752	0.328	0.239
" 44 年	35,979	138,811	12,556.671	32,204.152	0.349	0.232
" 45 年	30,733	121,299	9,592.549	26,564.481	0.312	0.219
大正 2 年	25,120	114,421	9,057.072	26,431.251	0.361	0.231
" 3 年	26,166	111,953	8,710.632	24,293.801	0.333	0.217
" 4 年	21,756	104,027	6,669.668	21,466.168	0.307	0.206
" 5 年	19,456	102,817	8,127.287	24,659.922	0.418	0.240
" 6 年	23,076	112,718	12,130.420	31,913.838	0.526	0.283
" 7 年	20,817	108,415	16,084.092	42,446.373	0.772	0.392
" 8 年	13,917	106,869	15,645.484	55,143.642	1.124	0.516
" 9 年	17,425	99,326	31,915.820	78,527.467	1.832	0.791
" 10 年	9,915	64,792	19,093.120	52,580.520	1.926	0.812
" 11 年	10,844	71,048	20,335.750	57,989.880	1.875	0.816
" 12 年	14,701	75,462	20,694.400	56,621.370	1.408	0.750
" 13 年	15,311	69,903	17,771.040	53,065.650	1.161	0.759
" 14 年	21,138	70,351	23,337.560	56,895.300	1.104	0.809
" 15 年	21,224	66,966	24,845.710	59,838.030	1.171	0.894
昭和 2 年	18,505	69,760	26,874.190	67,357.520	1.452	0.966
" 3 年	18,602	68,300	24,696.630	66,299.870	1.328	0.971
" 4 年	14,640	64,041	21,105.000	63,551.190	1.442	0.992
" 5 年	13,062	63,558	18,814.210	60,322.810	1.440	0.949

（註）各年とも下期の実績である。

「第 28 表

明治 4 2 年度 在監人作業種別一日平均工銭

(男子 1 日)

作 業 名	官司業	受負業	委託業	作 業 名	官司業	受負業	委託業
裁 縫 工	10.0 錢	9.3 錢	12.8 錢	洗 濯	14.9 錢	11.0 錢	12.3 錢
耕 耘	7.9	6.0	10.1	石 工	14.8	7.5	16.4
藁 工	3.5	5.5	3.0	彫 刻 工	8.2	9.1	11.1
木 工	13.8	13.9	13.2	紡 績 工	4.4	10.2	2.3
機 械 工	6.6	10.3	7.7	土 工	7.9	6.8	15.1
抄 紙 工	8.4	6.8	14.9	染 物 工	12.9	11.1	11.6
麻 工	2.6	4.9	4.5	金 物 工	13.0	8.3	13.0
革 工	15.4	19.3	17.9	人 夫	7.8	8.0	9.0
鍛 冶 工	16.5	12.1	12.6	鑄 物 工	21.6	—	19.6
運 搬	6.9	8.1	9.3	大 工	9.9	9.5	11.9
伐 木 工	6.9	8.0	7.0	洋 傘 工	5.2	10.7	—
煉 瓦 工	8.7	11.8	28.6	畳 工	12.3	11.3	9.0
竹 工	11.5	11.0	9.7	瓦 工	7.3	11.3	—
桶 工	12.6	10.7	11.9	宝 石 細 工	11.1	10.0	8.8
印 刷 工	12.9	9.6	13.3	探 礦	—	20.7	人員 914人
木 挽 工	15.5	16.4	14.4				

(15) 」

なお囚人の賃金と比較するため明治 4 2 年における職工賃金の一例をあげる。

「第 29 表

陸 軍 工 廠	72 銭
横須賀 "	74 銭
呉	79 銭
三菱長崎造船所	68 銭
民 営 船 舶	69 銭

(16) 」

囚人の工銭は、その全部が彼等の収入となるものではなく、法律の定むるところにより、その一部を支給されるのであるが、これも刑期の長短や累犯の別などによっても異なっていた。

明治 9 年 1 1 月に北海道開拓使から内務省に宛てた、管内懲役人の傭工銭および手当給与についての上申の一部を掲げてみる。

〔第 30 表

懲役人傭工銭並手当給与銭調書

大工木挽職					
1 級 1 人 1 日の工銭	2 5 銭	内 {	2 0 銭	官収	
			5 銭	給与	
2 級 "	2 0 銭	内 {	1 6 銭	官収	
			4 銭	給与	
3 級 "	1 8 銭	内 {	1 5 銭	官収	
			3 銭	給与	
4 級 "	1 5 銭	内 {	1 3 銭	官収	
			2 銭	給与	
5 級 "	1 2 銭	内 {	1 0 銭	5 厘 官収	
			1 銭	5 厘 給与	
草履並下駄職					
1 級 1 人 1 日の工銭	9 銭	内 {	8 銭	官収	
			1 銭	給与	
2 級 "	8 銭	内 {	7 銭	1 厘 官収	
			9 厘	給与	
3 級 "	7 銭	内 {	6 銭	2 厘 官収	
			8 厘	給与	
4 級 "	6 銭	内 {	5 銭	3 厘 官収	
			7 厘	給与	

(17) 」

第 30 表のごとく、工銭の 8 割から 9 割近くを官収されて、実際に囚人に支給されるのは僅かな額にすぎない。「定役囚現役一百日を経たるときは左の例に従ひ工銭を給与す。初入者には重罪囚十分の二 軽罪囚十分の三、再入者には重罪囚十分の一 軽罪囚十分の二、再入者にして刑期一年以上を経過し作業に勉励するときは初入者の例に準ずることを得」となっていて、同じ作業に従事しても、初犯、再犯または軽罪囚と重罪囚とで異っていた。

三池炭鉱では、労働者の勤労意欲を刺激して出炭能率をあげるために、採炭奨励制度をつくっていたが、囚人に対しても同様な規約を制定している囚人は刑期が長くなればなるほど、出獄後の将来に備えるという考えが少いため、工銭の貯蓄に関心がうすく、食物が最も喜ばれた。定められた科程を完了すると一定の奨励金を支給することとし、稼働した翌月に奨励金額に相当する食品を差

入れている。

明治 41 年の監獄法の制定によって、従来認められていた獄内における食料品の購求を禁止して、囚人処遇の厳正を保ち、物欲助長の弊を除去することにしたが、三池集治監の場合はその作業の特殊性によるためか、食品の差入れを認めている。

41 年 9 月以降、炭況の推移に応じて、しばしば増減しているが大正 7 年 1 月実施のものは次のとおりである。

1. 採炭・馬丁・石工・棹取・梓張に就労のものには、1 日に差入代金 4 銭 5 厘、大工・鍛冶工・油方・機械方・掃除夫は 3 銭、これ以外の日雇夫は 1 ヶ月 20 銭
2. 採炭就労者には半ヶ月間の平均出炭函数に応じ、次のように加給している。
100 人単位で、一方平均 550 函以上を出炭した場合、半ヶ月間 1 人につき 29 銭

同じく 580 函以上 35 銭、625 函以上 42 銭

奨励品は代価 5 銭以内のものとし、およそ次のようなものであった。

第 31 表

品 目	代 価	数 量
牛 肉	5 銭	牛肉 20 匁・里芋 40 匁
焼 芋	3 銭	160 匁
豆 腐	4 銭	2 丁
煮 豆	4 銭	40 匁
シラス	4 銭	40 匁
牡丹餅	4 銭	80 匁

大正 9 年 2 月実施の「採炭奨励品取扱例」によると支給方法は次のようになっていた。

(1) 奨励品は採炭に就役し、2 日間継続して科程を終了したものに 1 品、たゞし 1 人で

6 函以上出炭したものには別に 2 品を加給

(2) 柱引またはこれと同じ切羽で働き、2 日間継続して科程の 2 倍以上を出炭したものに 2 品、また 1 人で 12 函以上に相当する場合は別に 1 品を加給する。

(3) 馬丁・棹取・梓張・石工で 2 日間継続して出役したものに 1 品。

(4) 鍛冶工・大工・器械方・掃除夫で3日間継続して出役したものに1品。

(5) 日雇夫で9日間継続して出役したものに1品、その他となっている。1回の奨励品が多量で身体に有害と認められる場合は2回に分けて支給した。また奨励品を賭事に使用したり、使用しようとしたものに対しては、事後支給を廃止することになっている。

このほか、坑内の特に高温の場所で作業するものに対しては、別に次のものを加給している。全稼働時間の $\frac{2}{3}$ 以上を次の温度の場所で、採炭又は修理作業に従事した場合。

華氏90度以上 1人につき果物3銭5厘見当

同 95度以上 同上 7銭見当 (註、大正14年9月実施のもの)

運搬夫には、一定の目標を定め、その目標遂行の度合により1人2銭、4銭、6銭の奨励品を支給した。⁽¹⁹⁾

奨励品の支給は個人に対してだけでなく、グループ単位の能率に対する支給方法をも定めて、競争心をかき立てることによって出炭能率をあげようとした。ものを食べることが最上の楽しみである囚人、特に長期徒刑囚にとっては、速い出獄後に備えての、自由に使用できぬ、工銭として記帳された数字の増加よりも、直接に口腹の欲を満たしてくれる、食べものにより大きな魅力があった。

奨励品制度は、自由に飲食をとることのできない囚人を、いわば食べものによって釣り、その競争心をあおって能率をあげようとする巧妙な政策であるが、この結果やゝもすると囚人は目先の欲に釣られて、自らの健康を無視した肉体消費的な労働をつづけることになるのである。

官営三池炭鉱が、恵まれた自然的条件と、きわめて低廉安価な囚人使用により年々着実にその基礎を固めていったことは、さきにもあげたとおりであるが、三井移譲後も「三池炭礦事業追々進歩シ払下当時ニ比シ大ニ面目ヲ一新シタルノミナラス昨廿三年度収支決算其宜シキヲ得タルハ誠ニ満足ニ堪ヘサルナリ」⁽²⁰⁾と炭礦社本部が言っているように、すべり出しもきわめて好調であった。22年7月の地震によって、官営時代から、ひきつゞき開さく中であった勝立坑の

水没という痛手を蒙ったが、出炭は次のように順調に延びていった。

「第32表

明治22年～同29年間出炭高

%は三池出炭高の全国出炭高に対する割合

年次	全 国	三 池	%
明治22年	2,408,686	462,271	19.2
" 23年	2,629,150	487,641	18.5
" 24年	3,201,250	574,320	17.9
" 25年	3,201,075	468,831	14.6
" 26年	3,346,158	589,789	17.6
" 27年	4,302,280	665,756	15.5
" 28年	4,810,835	702,703	14.6
" 29年	5,059,848	693,046	13.7

(21) 」

坑内労働の主力である採炭夫は第33表のとおりで、囚人は22・27年が、

「第33表

採炭夫使用表

	囚 人	良 民	囚人比	良民比
明治22年	1,309	651	67%	33%
" 27年	1,290	622	67	33
" 29年	1,457	475	75	25

(22) 」

67%、29年は75%を圧倒的な高率を占めている。しかも囚人の賃金は「石炭一函の採掘賃が良民坑夫の6銭9厘に対して、囚人坑夫は3銭4厘2毛5糸で2分の1に満たない。したがって雇工銭の高下より論ずるも囚人の方安価にして経済上少からざる利益」があったが、労働力に依存することの大きい石炭産業に⁽²³⁾においては、労務費が原価の半分以上を占めるため、囚人使用によって三井資本のあげる利益は莫大なものがあったので囚人使用をますます積極化していった。

日清戦争を跳躍台とする我が国資本制生産の発展は、石炭市場の拡大と炭価の昂騰をもたらしたが、これを背景とし、囚人の低賃金を基盤として三池炭鉱は勝立坑を再興し、横須浜船渠の落成、七浦・勝立両坑に大型ポンプの備えつけ、七浦発電所の新設・従来の馬車鉄道に代わる運炭用鉄道の敷設によって坑外運搬に革新をもたらすなど、三池炭鉱の産業革命は着々と進行していったが、こうした近代化のために巨額の資本を投下しながらも、なお年々次のように莫大な利益をあげている。

「第 34 表.

年 次	純 益 金
明治 2 2 年	15, 788. 67. 0 ^{円 銭 厘}
〃 2 3 年	185, 414. 89. 5
〃 2 4 年	291, 797. 09. 7
〃 2 5 年	25, 044. 16. 7
〃 2 6 年	562, 589. 00. 7
〃 2 7 年	885, 101. 09. 1
〃 2 8 年	1, 115, 759. 41. 1
〃 2 9 年	973, 170. 85. 5
〃 3 0 年	743, 882. 05. 5

(24) 」

第 34 表は三井譲受当初の 22 年から 30 年末に至る 9 年間の、囚人労働の比重の最も高かった時期の収益表である。炭鉱払下代金 355 万 5,000 円の年賦償還金 25 万円づきの償却、ならびに三井銀行借入金 100 万円の利息を支払い、さらに毎年巨額の起業費を投入しつつもなお莫大な利潤を収めているのは、

その恵まれた自然的条件もさることながら、低廉な囚人労働力利用の結果であることはいうまでもない。

三井物産の益田孝が「鉱山会社も三池が元である。之を大きく考えると、三井全体の発展も三池から起っていると云ふてよい。物産会社もなく、鉱山会社もなく、銀行だけでは、三井も今日のやうには発展して居るまい」と語っているように三井財閥の基礎は三池炭鉱によって築かれたと(25)いって差支ない。

三池炭鉱を拠点として 31 年には山野炭鉱の開坑、32 年田川炭鉱の買収、40 年本洞炭鉱の買収など筑豊炭田に進出すると同時に、砂川ならびに美唄鉱区の一部を取得して、北海道進出の足がかりをつくり、三井鉱山は我が国最大の炭鉱独占資本を形成するのである。

- (1) 「三池刑務所旧記」
- (2) 同上の「囚徒使役上ノ景況具申」により作成
- (3) 「三池刑務所沿革」其の一
- (4) 大牟田市史 中巻 582頁
- (5) 19・20・21年は水野五郎、前掲書105頁、22年は田中修、前掲書90頁より
- (6) 「三池刑務所沿革」其の一
- (7) 同 上 其の一、其の二により作成
- (8) 同 上 其の二
- (9) 同 上
- (10) 同 上
- (11) 「三池刑務所沿革」其の二により作成
- (12) 高野江基太郎「日本炭礦誌」 227～228頁
- (13) 「三池鉱業所沿革史」労務課3
- (14) 「三池炭礦に於ける囚徒採炭の由来」より
- (15) 司法省「第十一監獄統計年表」により作成
- (16) 保谷六郎「労働の経済学」 162頁
- (17) 明治7年「雇工錢ニ関スル指令」より
- (18) 「日本近世行刑史稿」下 654～655頁
- (19) 「三池刑務所沿革」其の二
- (20) 「三池炭鉱決算書」
- (21) 「大牟田市史」 中巻 505頁
- (22) 「三池鉱業所沿革史」庶務課4により作成
- (23) 「三池刑務所沿革」其の二
- (24) 「三池炭鉱決算書」により作成
- (25) 「自伝益田孝翁伝」 177頁

第五章 囚人労働の終焉

罪囚労働力の坑内使役については、以前から服役中の囚人に対する苛酷な二重科役であるとして、内務・司法両省においても反対意見があった。特に幌内炭礦における囚人使役の失敗は「一営利会社の為二重の刑罰を科せらるゝもの」であるという非難を浴び27年末を以て廃止せざるを得なくなった。三池炭鉱の場合も、かねてから社会的な批判を受けていたが、33年4月、集治監医官、菊池常喜によって内部から告発された。彼が提出した意見書の主旨はほゞ次のとおりである。

元來、囚人に作業を科す目的は、怠慢を矯正し、健康を保全し、ある程度の技能に習熟させ、出獄後良民として生活ができるようにすることにあるから、作業の選定・賦課には次の条件が必要である。

(1) 刑罰の旨趣に適うこと (2) 感化上防礙なきこと (3) 健康上害なきこと。(4) 出獄後独力を以て生活しうること (5) 恩惠的の主旨に適うこと (6) 監獄費を補償するに足ること (7)可及的民業に影響を及ぼさざること、などであるが、三池集治監課役の主目的は採炭作業であって、正鵠を誤ること甚しく、監獄費を補償するということ以外はすべて作業賦課の条件に外れている。

三池集治監の死亡率は他の監獄に比べて最も高いが、本来ならもっと低くなければならぬ理由がある、即ち (1)年少者や高令者が少い (2)伝染病の流行したことがない。(3)規律厳正で、長期囚だけだから世事に煩わされず、また環境に馴れて不自由な圀圍の生活もあまり苦にならない (4)衣食住や動作の点で衛生上の欠点が少い (5)徒刑以上の男囚だけで概して奸惡破廉恥なものが多いので圀圍の憂苦や、慕郷の念が少いことなどがそれである。にもかゝらず、非常に多数の死者を出す原因は採炭作業以外には考えられない。

全国の各集治監に比べ、ことに氣候・風土などの点で恵まれているにもかゝらず、北海道集治監より死亡率がはるかに高いのは採炭課役の結果であって、三池集治監の不幸これより大なるものはないと主張して次のように論斷してい

る。「人若し人命を救うの術を知りて之を黙せんか、其之を死に至らしたるものと何ぞ扱はん。余坑内圧死の検視に臨み坑夫性肺労患者の枕頭に立ち、常に此感なき能わず。余己に之を救うの方法を知る。若し之を等閑に附せんか、余は年々数十の人命を虐殺せるものにして国家の大罪人たるを免れざるなり。是れ余が採炭業の囚人課役として不適當なるを絶叫し速かに之か全廃を希望して歇まざる所以なり。然れ共人或は謂わん。炭坑業は国益的事業なり。大に奨励せざる可からず。其之を奨励せんか。何れ民力を籍らざるべからず。既に民力を籍るに於ては良民を苦しめしめんより寧ろ社会を侵害せし処の囚人を使役するを至当とすべしと。是れ一理なきに非らざる如きも、大なる誤謬というべきなり。蓋し監獄作業を以て囚人懲戒の具と認む可らざるは冒頭既に之を論せり。将た囚人は強制的課役たり。良民は自由労働なり。其間衛生の点に於て月齢の差なかるべからず、且つ監獄作業は可及的民業に影響を及ぼす可らざるものとせば、速に囚人の採炭課役を廃止し之を良民労働者に引譲らざるべからざるは監獄界の国民に対する義務として、一日も躊躇す可らざるものなり」。以上の(1)ような菊池医師の意見書は集治監のみならず、熊本県監獄および炭鉱側にも大きな衝撃を与えたが結局、この意見書は調査の結果を誤ったものであり、別個の調査によれば呼吸器病のごときは却って反対の結果が出ているので、相当の設備さえすれば囚人を坑内労働に使役しても差支えはないと結論し、菊池医師の良心的な内部告発は無視され、うやむやのうちに葬り去られた。

旧監獄則は明治22年に制定されたものであるが、人権尊重思想の発達や欧米の獄則の影響等によって、我が国の監獄制度は30年以降次第に整備されてきた。32年に監獄則ならびに同施行細則の一部が改正されたが、監獄作業に関する改正事項では、作業賦課については従来単に「囚人の体力に応じて行う」という簡単な規定だったのを、本人の刑名・罪質・年令・技能や将来の生活等を斟酌する旨を定め、行刑個別化の理想、特に教化主義による、作業の職業訓練の方向を明確に打ち出した。これは時勢の進運に応じて監獄改良論の主張などを取入れたもので、従来やゝもすると収益主義もしくは懲戒主義に陥ちいろ

うとする傾向が強かったが、監獄作業制度の転換を指向したこの改正は、行刑制度の大きな前進を示すものであった。

菊池医師の意見書提出もこうした時勢の動きを反映するものであった。こうした時代の進展は、囚人労働力を採炭作業の根幹として、これに依存しきっていた三井資本に大きな衝撃を与えた。囚人使役は労働力の数的確保・労働コストの節減等の点で非常に有利ではあるが、その反面、行刑当局その他との接渉の煩雑さや、法令改正などによる方針の変更、当局側の都合による出役人員の増減その他不安定な要素や不都合な点も少なかった。

33年4月に集治監から看守不足という理由で、勝立分監を廃止し勝立坑就役中の囚徒を宮原坑に移してくれとの要望があった。

当時熊本県囚徒は七浦坑に、集治監囚徒は宮原・勝立の両坑に就役していたが、要望どおりにすると勝立坑は良民鉱夫だけになり、囚人使役の方針で計画し設備したことが根本的に狂い、操業上大きな困難が生ずるので、その代替として福岡県囚徒の派遣方を同県に働きかけ、分監設置に必要な経費も毎年寄付するということで接渉した。

福岡県当局も乗り気になり、最初400名程度の派遣を考えていたが、多い方が経済的だとして600名～700名の出役を計画している。同県下の囚人総数約1,600人のうち500人内外は鉱夫経験者で、採炭作業に経験を持ち好都合だということで典獄や検事をも賛意を表した。

この接渉の直接の責任者三池炭鉱主事、阿部唯吉はおよそ次のような経過を団琢磨理事に報告している。

勝立分監は一昨年開設したばかりであるのに、今にわかに引揚げを通告するなど、当局の方針が一定せず将来が不安である。幌内炭鉱における囚人使役の失敗によって、内務省では囚人の坑内就役に反対が強いが、絶対的なものではないようである。最近の監獄則改正により監獄費が国庫支弁となり、また33年7月から監獄事務の内務省から司法省への移管が決定したので、知事の権限だけで囚徒の派遣を決定できなくなったため、知事が近く上京して本省の方針をたどって善処するとのことである。熊本県でも囚徒の出役を廃止したい意向がうか

がわれるので、誠に痛心のきわみである。

近年出役囚徒数が次第に減少をつゞけ困っているが、今後もし囚徒の使用が不可能ということにでもなれば、事業運営上由々しき事態となるので熟考を要する問題である、ということで三井鉱山本店から関係各方面への働きかけを要請している。⁽²⁾これを受けて三井社長から福岡県知事に分監設置願を提出したが、同時に阿部主事から次のような意味の覚書を知事に手渡した。

一、囚徒を採炭に使役することは戒護検束上または衛生上からみて、監獄の主旨である懲戒感化の目的遂行上面白くないという意見が一部に行われているが、よく利害を研究して工役に従わせると、むしろ次のような好結果をあげることができる。

- (1) 行刑に要する不生産的費用を補うことができる。
- (2) 比較的工賃が高く囚徒の所得が多い。
- (3) 囚人に再犯者が多いのは、出獄後一定の生業をもたないからで、もし在監中に採炭作業などに習熟しておれば、出獄後もこれを継続できるので再犯の防止に貢献できる。

二、衛生上の件については、鉱業警察規則改正の結果、厳重な規定が設けられたし、特に三池炭鉱では各坑に扇風機を据付けて、新鮮な空気を坑内に送っているので通気不良の心配はなく、また最近坑内に電灯をととしたので、煤煙が呼吸器に有害であるという議論は三池では杞憂にすぎない。

三、検束上からいえば、採炭作業は一ヶ所に多人数を集めるのではなく、一ヶ所5人以内で作業を行うものであるから、土木工事の現場などよりもかえって安全である。

四、幌内炭鉱の不成功が問題になっているが、三池炭鉱では坑内の諸施設も整備され、厳重な監督下で作業に従事しているので心配はない。

こうした本店と現地をあげての懸命の努力に対し⁽³⁾福岡県では始終好意を以て応えたので、成功するかにみえたが結局「福岡県監獄分監設置願却下 三池集治監拘禁囚は之を減少せず且つ同監勝立出役場は依然据置かれ本県出役場設

置の儀は許可不相成旨其筋より申来候条本願書は却下す 明治三十三年八月十日」と結着し、一応現状維持となり差し当っての不安は除かれたが、囚人使役可否⁽⁴⁾についての問題はなお残されたまゝであった。

囚人の使役に執着した三池炭鉱では、福岡県囚徒使役願が却下されると、執念ともいふべき強引さで、今度は台湾の囚徒600人の使役の件を立案し、本店に認可を申請している。これに対し本店では、台湾の囚徒は採炭作業に未経験であるうえ言語も不通で、人情・性行もまた異っている。こうした台湾の無頼漢600人を会社から請願し、会社の責任において、就労させることは非常に危険であり得策ではない。

しかし一応司法省と交渉してみたが、同省では反対意見であった。したがってこの件は許可し難い。今後は「到底囚徒は頼むに足らざるに付」良民鉱夫の募集に努力せよ、と指示し良民鉱夫中心への転換方針⁽⁵⁾を伝えている。阿部主事が「熊本の方は囚徒使役の方針多少相変り居る模様にて囚人の数も追々減少致居り………底気味悪敷」と報告していたことが事実となり、35年10月10日限りで全員熊本に引揚げたので、あとは集治監の囚人だけになった。⁽⁶⁾

日清戦争後の29年頃から32年頃までの期間は石炭産業始めて以来の活況を呈し、特に安川・貝島・麻生をはじめとする筑豊土着資本の多くは、この時期に大成したものが多し。石炭産業がその基礎を確立したのもまたこの時期であり、三池炭鉱もこの間に基礎固めを終り躍進の時代に入るのである。

しかし33・34年頃から反動期に入り、経済界は不況にあえぎ、石炭業界も不振の時代に入ったが、三池炭鉱は引きつゞき設備の近代化を進めていった。

- 明治30年11月 万田第二堅坑の開さくに着手す。
- 〃 31年10月 坑内に電灯の使用を始む。
- 〃 32年 5月 万田坑で空気圧縮機ならびにさく岩機を使用す。
- 〃 32年 6月 宮原第二堅坑開さくに着手す。
- 〃 32年 7月 宮原坑内に蒸汽曳揚機を設置す。

- 明治 33 年 2 月 万田坑でデーヴィポンプ 3 台が運転を開始す。
- 〃 34 年 6 月 大浦坑口の汽力エンドレスロープを電動機に変更す。
- 〃 34 年 11 月 勝立坑でバンチャー式コールカッターを試用す。
- 〃 36 年 3 月 万田坑内安全灯を使用す。
- 〃 36 年 9 月 宮浦坑でリーバラポンプの使用を開始す。
- 〃 38 年 4 月 勝立坑で柱引採炭を開始す。 (7) 」

こうした機械化の進展に応じて採炭方式も 38 年 4 月、従来の地山採炭法から柱引採炭に移行した。全国の炭鉱に先きがけての大々的な近代化により、事業規模も拡大し、出炭も次のように年々上昇をつけ、日本一の巨大炭鉱として他を大きく引き離していった。

「第 35 表

明治 30 年～45 年における三池炭鉱出炭高

年 次	出炭高 千屯	年 次	出炭高 千屯
明治 30 年	633	明治 38 年	1,321
〃 31 年	749	〃 39 年	1,478
〃 32 年	719	〃 40 年	1,493
〃 33 年	737	〃 41 年	1,527
〃 34 年	905	〃 42 年	1,574
〃 35 年	967	〃 43 年	1,790
〃 36 年	1,114	〃 44 年	1,939
〃 37 年	1,256	〃 45 年	2,173

「三池炭鉱は明治 30 年代に、その採炭・運搬方式において二つの変化が生じた。一つは炭柱を残存しておく地山採炭法から、柱引採炭へ移行したことであり、これ

(8) 」 に伴って坑内の作

業管理は一層厳格になっていった。第二は動力としての電力の導入であり、これによって運搬坑道の延長に伴うコスト増大の問題を一挙に解決した」が、この時期になると、ようやく囚人労働の限界が見えはじめてきた。

こうした合理化・近代化の進展は同時に、これに対応できる良質の熟練労働者を必要とすることになり、従来どおりの囚人労働に、いつまでも依存することが許されなくなってきた。

「第 36 表

良民，囚徒採炭夫使用比較表（採炭夫のみで他職種を含まず）

	大浦坑		七浦坑		宮浦坑		勝立坑		宮原坑		万田坑		四山坑		合 計		割 合 %	
	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人	良民	囚人 %	良民 %
明治 2 2 年		479	1024		285	172									1,309	651	67	33
" 2 7 年		484	1,123		167	138									1,290	622	67	33
" 2 9 年		475	952		248	257									1,457	475	75	25
" 3 0 年		420	465		138		293								896	420	68	32
" 3 1 年		344	502		135		201								838	344	69	31
" 3 5 年		451		136		327		295	276						276	1,209	19	81
" 3 6 年		398		134		355		352	266						266	1,239	18	82
" 4 1 年		353		138		357		431	257		603				138	2,000	7	93
大正 2 年		341		467		1,084		502	180		1,658				180	4,052	4	96
" 7 年		277		608		1,130		628	121		1,500				121	4,143	3	97
" 1 2 年		159		275		754		309	100		878	285			100	2,658	4	96
昭和 3 年				291		573			115		862	498			115	2,224	5	95
" 5 年				218		419			99		621	453			99	1,711	5	95

(10) J

さらに 32 年 12 月には、多年の懸案であった監獄費国庫支弁法案が議会を通
過し、翌年 7 月には監獄事務が司法省に移管され、36 年には全国の監獄が司
法省の直轄となり「囚人の使役に関しては受請人又は依頼者をして干与せしむ
ることを得ず」というように、以前にもまして囚人の取扱いが難しくな⁽¹¹⁾った。

こうしたことから三井鉱山では良民労働者中心に方向を転換し、囚人労働依
存の度合を徐々に少なくすることにしたため、35 年になると採炭囚が激減して
いる。第 36 表のように囚人採炭夫の良民採炭夫に対する比率は、22 年～31
年頃までは 67% から最高 75% にも達したが、次第に低下し、熊本県囚徒引
揚げ後の 35 年には 19% と激減し、以後さらに減少の一路をたどっていった。

特に大正時代に入ると良民採炭夫の増加とは逆に、3% から 5% 程度のきわめ
て影のうすい存在となり、生産過程における重要性も昔日の比ではなくなった。
(註、囚人を除く大正 5 年の労働者総数 16,190 人)

第一次世界大戦の勃発により炭価は暴騰し、石炭産業は大正 7・8・9 年 にわ
たって未曾有の活況を呈したが、大戦終了後の不況により、10 年に入ると市価は急
落し、その後引きつゞき 「第 37 表 炭 価 の 推 移

不振をきわめた。

九州一種炭（門司相場）指数は大正 3 年を 100 とする

こうした中で三池
炭鉱は生産機構の合
理化を強力に推進し、
坑内運搬の機械化や
手繰り穿孔から電気
ドリルへの転換、11
月には万田坑で長壁
式採炭の開始、さら
に昭和 4 年からは四
山坑において前進長
壁法採炭の実施など、
採炭面における機械

年 次	炭 価	指 数	年 次	炭 価	指 数
明治 40 年	9. [□] 60	107	大正 8 年	28. [□] 33	317
" 41 年	9. 20	103	" 9 年	28. 55	319
" 42 年	9. 04	101	" 10 年	20. 20	226
" 43 年	9. 19	103	" 11 年	16. 77	187
" 44 年	9. 43	105	" 12 年	16. 83	188
大正元 年	9. 36	105	" 13 年	16. 00	179
" 2 年	8. 95	100	" 14 年	16. 18	181
" 3 年	8. 95	100	昭和 元年	16. 07	180
" 4 年	8. 19	92	" 2 年	16. 68	186
" 5 年	9. 02	101	" 3 年	16. 30	182
" 6 年	15. 67	175	" 4 年	16. 72	187
" 7 年	21. 31	238			

化・合理化は一段と推進された。

このような採炭面の機械化と運搬系統の機械化は、労働者に対して相当な技能と熟練度を要求することになり、採炭労働にも質的転換が行われざるを得なくなってきた。

したがって、この時期になると囚人労働の意義は量的にも質的にもほとんど消滅し、あとはたゞ完全廃止の時を待つばかりの状態であった。

昭和に入ると不況はいよいよ深刻化し、三池炭鉱では港頭貯炭が30万屯に達しようとしたので、起業の繰り延べ、冗費節減など極度の緊縮政策をとるとともに、女子坑内夫を廃止し、昭和5年には合理化の名の下に人員整理を強行して、在籍労働者の約34%にものぼる3,376人を解雇した。これと同時に囚人使役の廃止に踏み切ることで「囚徒の就労している宮原坑は老境に入り余命いくばくもない状況となったが囚徒を移す適当な場所もなく、また炭界不況のため一般労働者も整理せざるを得なくなったので受刑者就業に関する契約を⁽¹³⁾解除したい」と申し出た。刑務所では突然のことであり、また三池刑務所設置の目的は、かゝって囚人の三池炭鉱就労にあるので、契約の解除は必然的に刑務所廃止にもつながることであるから、たとえ出役人員を減少するとしても、全面的解除だけは見合わせるように強く要望した。司法省においても、囚徒を坑内に使役することは好ましくないが、長年にわたって実施してきたことを、いま一挙に廃止することは無理であるから、少くとも1・2年の猶予を以てするように希望し、それも困難からせめて昭和6年3月末までという要望も、直ちに断行せざるを得ないという三井の強硬な意見に押されて、次のとおりに結着した。

「大正十五年十月十一日、昭和五年三月三十日付を以て契約締結せる受刑者就業に関する契約並同賃銭規程は昭和五年十二月限り廃止することを協定す。右契約の証として正本二通を作成し各屯通を保有す

昭和五年十二月二十五日

三池刑務所長	引 野 信 夫
三池鉱業所長	属 最 吉 』
	(14)

こうして明治6年以来、約60年にわたる三池炭鉱の囚人労働は事実上終わった。なお坑外の受負作業であるコークス用蒾織の藁工受負契約および鍛冶用スパイク製造のための鍛冶工受負契約はともに6年2月末を以て廃止され、完全に囚人労働の幕を閉じたが、同時に、半世紀以上にもわたり三池炭鉱と密接不離の關係にあった三池刑務所も6年3月をもって廃止された。

(1) 「三池刑務所沿革」其の一

(2) 同 上

(3) 同 上

(4) 同 上

(5) 同 上

(6) 同 上

(7) 「三池鉱業所沿革史」総年譜より

(8) 「大牟田市史」中巻 524頁

(9) 隅谷三喜男「炭鉱における労務管理の成立」企業経済分析 259頁

(10) 「三池鉱業所沿革史」庶務課4

(11) 「日本近世行刑史稿」下 1269頁

(12) 「日本鉱業発達史」中巻 192~193頁より

(13) 「三池鉱業所沿革史」庶務課4

(14) 同 上

む す び

労働力創出の不十分であった我が国資本主義の揺籃期に発生した、囚人労働という前期的労働關係は、特に官営三池・幌内の両炭鉱に採用され次第に強化されて、原始蓄積期における基幹労働力として両炭鉱の発展の原動力となり、民営移管後も労働力の構成は囚人中心路線がそのまま継承され、さらに一層増強されたが、幌内炭礦ではその極端な酷使や頻発する事故による、おびただしい傷病・死亡あるいは逃走等の発生によって世論の非難を浴び、これが直接の原

因となって明治27年11月限りで囚人の使用を廃止した。

三池炭鉱ではその後も集治監囚徒を中心に31年頃までは採炭労働の中軸として、良民採炭夫に対する比率も67%から75%に達し採炭作業はその大部分を囚人労働に依存していた。

切羽の機械化が未発達の前時代においては採炭作業は、その大部分を労働者の筋肉労働に依存する単純作業だったので採炭・運搬関係に大量の労働者を必要とし、低廉な囚人労働者による人海戦術もきわめて有効であった。

そのため幌内炭礦から囚人引揚げの意見が出た際にも、北炭資本の頑強な抵抗によって改革が一時難行している。

日清戦争を経て三井産業資本も確立期に入り、三池炭鉱の近代化が進み生産機構が整備されてくると「こゝだもうよい、もうどうせ良民でやらねばならぬ」⁽¹⁾と団琢磨が言っているように、近代化に対応できる良質の熟練労働者を必要とするようになってくる。

しかし「俄に囚徒の坑内作業を廃さるれば頓に坑夫の募集に困難を来し、賃金も高くなり、若くは多数の募集費を要する」ことになるので、囚人使用廃止⁽²⁾の必然性は認めながらも、まだ一挙に廃止するまでには至らなかった。

旧獄制は文明開化によって改革されるのであるが、これには治外法権撤廃のため、西欧の監獄制度にならって改革しなければならぬという政治的理由も伴っていたので、政府は明治5年の監獄則制定以来、14年、22年と改革を重ね、30年には内務省警保局から監獄局が独立した。我が国多年の念願であった、治外法権の撤廃に伴って行われた監獄則ならびに同施行規則の改正は、画期的なもので、従来の懲戒主義あるいは収益主義的傾向を是正し「囚徒ヲシテ是等必要ノ工事ニ服従セシメ若シ之ニ堪ヘズ斃レ死シテ其人員ヲ減少スルハ監獄費支出ノ困難ヲ告グル今日ニ於テ万止ムヲ得ザル政略ナリ」などという非人道的⁽³⁾・使い棄て的な取扱いではできなくなり、さらに従来、地方支弁だった監獄費の国庫負担が実現したため、獄舎の増改築等も次第に促進されて明治初年以来の慢性的過剰拘禁現象もようやく緩和のきざしを見せてきた。35年10月の熊

本県囚徒の引揚げもその一つの現われであった。

35年12月に炭鉱払下げ代金の最終年賦金を納入し終ったので三池炭鉱の所有権は完全に三井の手に移った。

この時期になると生産機構の近代化は一層進捗し、出炭高も36年には100万屯ラインを突破し、労働者総数も7,374人を数えている。

一方囚人採炭夫は29年をピークとして以後減少をつけ、特に35年には熊本県囚徒の引揚げもあって276人に激減した。

石炭原価の中に占める労賃の比重のきわめて高い石炭産業にとって、一般労働者の半分以上の低賃金で使役できる、囚人労働による利益は、莫大なものがあるので、たとえその比率が低下したとはいえ、三井資本はなおこれに強く執着して急に捨てきれなかった。このことは33年の福岡県囚徒の派遣申請にあたり、本店・現地が一丸となつての運動の経過でもみたとおりであり、また福岡県囚徒の出役が不可能になると、台湾の囚徒約600名の派遣要請を画策していることなどによつても、うかがうことができる。しかしこれらすべてが不成功に終つたため「囚徒ハ頼ムニ足ラス」とようやく囚人使用に見切りをつけ、良民坑夫使役の方針を転換することになった。

時代の進運に伴つて監獄則も次第に整備され、特に小河滋次郎博士を中心とする監獄改良運動の背景には、幌内炭礦出役の失敗という問題も絡んでいた。で、行刑制度の近代化とともに、囚人の取扱いも次第に難しくなり、また行刑当局の方針がしばしば変更されるため、炭鉱側としては長期安定計画が立てにくく、さらに当局との交渉も非常に煩わしくなつてきた。

良民鉱夫中心に方向転換後、鉱夫募集に力を注いだ結果、第38表にみられるように、34年には坑内夫3,000人を超え労働者総数も6,000人に迫ろうとしている。この時期になると炭鉱に対する社会的認識もようやく深まり、労働市場も拡大して良質労働力の調達に以前ほど困難を感じなくなった。

いうまでもなく囚人労働は、囚人の自由意志によるものでなく、苦役であり、強制労働であるから、勤勞意欲が低く労働生産性の向上に多くを期待できな

〔第38表〕

明治期（創業以来）の三池炭鉱人員の推移

年 別	坑 内	坑 外	計
明治22年	人	人	2,888人
" 23年			2,928
" 24年			3,603
" 25年			2,712
" 26年			3,410
" 27年			4,868
" 28年			4,204
" 29年			4,817
" 30年			5,161
" 31年			5,015
" 32年			5,152
" 33年	2,582	2,510	5,092
" 34年	3,042	2,844	5,886
" 35年	3,427	3,462	6,889
" 36年	4,337	3,037	7,374
" 37年	4,251	2,897	7,148
" 38年	4,263	3,258	7,521
" 39年	5,471	3,470	8,941
" 40年	5,559	3,991	9,550
" 41年	6,235	4,088	10,323
" 42年	7,179	4,965	12,144
" 43年	7,542	4,895	12,437
" 44年	8,230	4,856	13,086
" 45年	8,285	5,276	13,561

(4) 」

いので、30年後半になると三井資本にとって囚人は、むしろ桎梏とさえ感ぜられるようになってきた。囚人労働は原始蓄積課程においては非常に重要な意義をもっていたが、量的にも質的にも自ら限界があり、さらに制度上の制約も加わって、発展をつづける三池炭鉱にとり、産業資本確立の暁には当然、廃棄さるべき必然性を内包していたのである。

40年代になると囚人採炭夫の数は良民鉱夫の増加とは逆に100人台となり、社会的批判を受けてまで存続する意味はなくなり、何時廃止しても差支ない状況だったので、昭和

初頭の経済恐慌を契期として、全面的廃止に踏切ったのであるが、廃止に至る最終の段階において、三井資本は非常に強硬な態度で臨み、刑務所・司法省の存続あるいは廃止延期の要望に対して、耳をかさず強引に押切ったことは、石炭

業界空前の不況という事情にもよるが、当時すでに団琢磨を指導者とする我が国最大の三井財閥は、政財界に対する発言力も強く、三井鉱山自体が一つの小コンツェルンを形成し、我が国トップ企業の一つに成長していたので、その強硬方針の前には政府の要望も空しかった 「第 39 表

たのである。

全国重要炭鉱採炭夫平均賃金

約 60 年間にわたる囚人労働の及ぼした影響は多いが、その重要なものをあげてみる。

(1) 囚人の劣悪な労働条件が一般労働者の労働条件を規制した。

「殊に三井の三池炭坑は大牟田監獄の罪人を使役する故に、其影響として残余の労働賃銀は非常に安く、彼等自由坑夫の生活の下等にして憐れなるは言語に絶したり」と明治 36 年に三池炭鉱を視察した片山潜も述べているように、囚人と一般鉱夫が同じ坑内で同じ作業に従事し、しかも囚人の賃金が極端に低いということになれば、これが一般鉱夫の賃金に影響を与えることは当然である。

第 39 表の示すとおり明治 39 年における三池炭鉱の賃金は、三菱上山田炭礦とともに最も低い。43 年はさらに低くなっている。坑内条件がよく、設備がすぐれ、能率も非常に高い三池炭鉱において賃金は最も低く、これを同

炭 鉱 名	明治 39 年	明治 43 年
夕張第一	1. 34. 3 円 銭	1. 08. 9 円 銭
幌 内	1. 00. 2	1. 11. 0
空 知	97. 1	98. 1
入 山	65. 0	69. 5
好 間	75. 0	64. 0
大 辻	65. 0	72. 8
大ノ浦	63. 0	75. 0
新 入	64. 0	70. 0
明 治	64. 0	81. 0
古河西部	87. 0	94. 0
二 瀬	69. 5	70. 0
芳 雄	71. 0	65. 0
山 野	74. 4	74. 6
鯰 田	59. 2	63. 5
忠 隈	75. 0	76. 0
下 山 田	78. 0	87. 0
上 山 田	53. 6	77. 7
田 川	80. 0	83. 0
赤 池	65. 0	78. 0
峰 地	70. 0	75. 0
相 知	69. 0	63. 5
芳 谷	66. 5	69. 0
杵 島	60. 0	64. 0
高 島	64. 7	68. 5
三 池	56. 6	48. 2

(6) 」

に三井鉱山の田川・山野両炭鉱に比べても、第40表のごとくすべての職種にわたって甚だしく低くなっている。

「第40表

三井三山・平均賃金（明治39年）

職別・男女別		三 池	田 川	山 野	
		錢	錢	錢	
坑 夫	男	56. 6	80. 0	74. 0	
	女	—	80. 0	69. 0	
支 柱 夫	男	46. 1	56. 0	53. 0	
	女	24. 0	—	—	
坑内運搬夫		37. 1	46. 0	49. 4	
選 炭 夫	男	22. 0	42. 0	33. 2	
	女	20. 2	26. 0	23. 0	
職 工	男	49. 3	56. 0	57. 5	
	女	44. 7	53. 0	53. 1	
雑 夫	{ 男	{ 内	28. 0	39. 0	57. 4
		{ 外	27. 5	45. 0	37. 5
	{ 女	{ 内	23. 7	33. 0	31. 6
		{ 外	20. 0	29. 0	25. 4

また第41表にみるように全

国各地方の平均賃金も三池だけが極端に低額になっている。

「第41表

石炭山地方別

平均賃金（明治39年）

北海道地方	円 錢
常 磐 "	1. 11. 6
筑 豊 "	68. 9
唐 津 "	67. 2
高 島 "	61. 2
三 池 "	64. 7
	56. 6

(8) 」

これはまさしく、囚人の低賃

(7) 」 金が一般鉱夫の賃金を制約して、

これを引下げた結果に外ならない。

さらに労働時間についてみれば次頁・第42表のごとく古河下山田炭礦に次いで11時間となっているが、これも採炭囚の12時間の強制労働の影響であることはいうまでもない。

(2) 囚人労働は一般労働者の就労の機会を阻害した。

官営時代の初期、炭鉱近傍の半農・半鉱の兼業鉱夫に各磐下坑の採掘作業を行わせていたのを、不況のため閉鎖して解雇を申渡したことがあったが、彼等はこれを承服せず各所に集合して「己レ等炭坑ノ使役ニ与ラサルヲ遺憾ニ思ヒ常ニ語リテ曰ク我等ニシテ自今坑役ヲ許サレサルハ斯ク各県囚徒ノ労役ニ就クアレハナリ我等ニシテモ一朝獄衣ヲ着スルノ身タランニハ爰ソ今日ノ糊口ヲ

〔第 42 表〕

九州地方重要炭鉱採炭夫の
1 日平均労働時間
(明治 39 年)

大	六	浦	9 時間
新		入	8 "
明		治	9 "
鯨		田	10 "
二		瀬	10 "
芳		雄	6 "
山		野	10 "
忠		隈	10 "
下	山	田	12 "
上	山	田	10 "
田		川	7 "
赤		池	10 "
杵		島	10 "
相		知	9 "
高		島	8 "
三		池	11 "

凌クニ困ラン安ンシテ坑役ニ従事スルコトヲ
得ンニト、嗚呼実ニ如此天下ニ容レラレサルシ
亡命無頼ノ悪徒ヲ欣羨シ他ニ産業ノ道ヲ求メ
ス己カ欲シテ罪囚タランコトヲ希フ」などと
いうこともあったし、また「唯この上益々増
加すへき者は罪囚にして、是迄の近郡村の良
民中、炭坑に頼りて以て衣食の計を立てたる
幾百人の労働者は、罪囚即ち坑夫の増加せし
為、多少仕事の上に障碍を被むる傾向あるは
亦嘆すへきの事と云ふへし」というように囚
人使用によって家計補充的労働者の就労の機
会を奪ったが、ひいてはこれが一般労働者の
労働条件の低下を招来する原因ともなるもの
である。

(3) 囚人を使用したため、三池炭鉱では本
来の意味の納屋制度が定着しなかった。

最も典型的な意味での納屋制度は、納屋頭

(9) 」などの中間介在者が、資本の下で自らの責任
において労働者を雇入れて、これを自己の納屋に収容し、私的制裁を背景とす
る暴力機構の中で、債務奴隷的な関係によって労働者を支配し、作業面・流通
面において中間搾取を行う前近代的な労働力統轄の方法であって石炭産業の揺
籃期から明治・大正年間を通して広く行われた労働搾取形態であるが、三池炭鉱
ではこのような意味における納屋制度は成立しなかった。

これは三池炭鉱が官営ではじまり、三井移管後も最も近代的な大炭鉱として、
移動の激しい渡り坑夫の採用を極力さけたことや、与論島人夫の一括使役など
にもよるが、何よりも囚人の大量使役によって、坑内第一線の基幹労働力を確
保できたことがその最も大きな理由である。

(4) 囚人労働は炭鉱労働のイメージを非常に暗いものにした。

江戸その他の無宿者が佐渡炭山に送られ、江戸の山狼^{やまいぬ}などと呼ばれて坑内の水替人足として強制使役されたことが、佐渡炭山を「此の世の地獄」として世人に恐怖感を抱かせ、さらにこれが炭山労働者に対する蔑視・嫌悪の念を植えつけることになったが、同様に、三池・幌内就労の囚徒は兇悪無頼な人間の集団であり、したがってこれと同じ作業に従事する炭鉱労働者もまた不逞・下賤の人間であるなどという、誤った先入観を一般に抱かせるなど、囚人労働は炭鉱労働全般に対して長く陰惨の影を落とし、たださえ暗い炭鉱のイメージを一層暗くするとともに、炭鉱労働の特殊性と相俟って良質労働者の流入を阻害したが、特に三池炭鉱では労働者募集に悪影響を及ぼした。

第二次大戦末期、連合国の俘虜を全国の炭鉱で強制使役したことは、まだ我々の記憶に新しいことであるが、三井炭山では第4.3表のごとく20年8月現在で石炭関係7事業所で3,421人、金属関係7事業所で1,428人を収容し、三池炭鉱だけで1,409人の俘虜を労働者として使用していて、終戦直後、種々のトラブルが起ったが、20年9月16日に全員の送還を完了した。

「第4.3表

終戦時における三井炭山
各事業所別俘虜労働者数

(石炭山のみ)

三	池	1,409 人
田	川	398
山	野	573
砂	川	—
芦	別	611
美	唄	430
新 美	唄	—
合 計		3 421

- (1) 男爵 団琢磨伝
- (2) 同 上
- (3) 「北海道三県巡視復命書」田中修 前掲書 79頁
- (4) 「大牟田市史」中巻 526頁
- (5) 片山潜「炭坑夫の虐待」社会主義第20号(明治36年9月)
岸本英太郎 明治労働問題論集 30頁
- (6) 明治39年は農商務省鉱山局篇「鉱夫待遇事例」51~54頁
同43年は高野江基太郎「日本炭礦誌」85~86頁 } により作成
- (7) 「鉱夫待遇事例」52~53頁により作成
- (8) 同 上 47~48頁により作成
- (9) 同 上 36~43頁により作成
- (10) 「炭山沿革史抄」日本労働運動史料 第一巻 76頁
- (11) 前掲「地方下層社会」明治文化全集第15巻社会編(続) 351頁
- (12) 「資料三池争議」 14頁

※ 納屋制度については、隅谷三喜男教授、馬場克三教授の研究をはじめとして多くのすぐれた研究があるが、筆者関係のものとしては次のものがある。

- a 「納屋制度論」 (1) 関西大学経済論集第14巻第1号
- b 同 上 (2) 同 上 第2号
- c 「炭鉱納屋制度の崩壊」 (1) 日本労働協会雑誌 1964年 5月号
- d 同 上 (2) 同 上 7月号
- e 同 上 (3) 同 上 8月号

(何れも市原亮平関大教授と共同執筆)

参 考 文 献

1. 稿本「三池鉱業所沿革史」(三池鉱業所ならびに三井文庫所蔵)

我が国石炭産業発達史の研究に不可欠の重要文献とされている。第二次大戦

前に三井鉱山 50 年史の一部として編集された大きな記録であるが、戦局の進展により出版が中止されて草稿のまま保存されている。一般に社史・伝記の類は粉飾されたり、都合の悪い個所はカットされることなどが多いが、この記録は公刊以前の草稿なので、かえって資料価値が高い。勿論生のままの原稿ではないので若干の修飾等がみられないでもないが、重要な資料として大牟田市史や石炭産業発達史・炭鉱労働関係の文献には、これを参考としたものが非常に多い。

労働問題は石炭産業にとっては、特に知られたいくない恥部であるため、残された正確な資料が非常に少ないので、この意味においても三井鉱山のこの資料は貴重なものである。

2. 稿本「三池刑務所沿革」三池鉱業所沿革史の一部をなしている。

この小論は特にこの 1・2 を中心としてまとめたものである。

3. 水野五郎「幌内炭礦の官営とその払下げ」北海道大学経済学研究 9

4. 田中修「資本主義確立期北海道における労働形態」

北海学園大学論集 第 3 号

幌内炭礦関係については、特に 3・4 に負うところが多い。

5. 財団法人矯正協会、矯正図書館所蔵「日本近世行刑史稿」・刑政、その他の諸文献

(同図書館には行刑関係のあらゆる貴重な文献が所蔵されている)

6. 財団法人三井文庫発行の三井文庫叢書ならびに、同文庫所蔵の諸文献

(同文庫には大きな数にのぼる三井関係の貴重な文献が網羅されている)

7. 「大牟田市史」中巻

8. 隅谷三喜男「炭鉱における労務管理の成立」企業経済分析

9. 同 「日本石炭産業分析」

10. 正木亮「新監獄学」

11. 農商務省鉱山局編「鉱夫待遇事例」

12. 高野江基太郎「筑豊炭礦誌」・「日本炭礦誌」

13. 久保山雄三「日本石炭鉦業発達史」
14. 楫西光速「日本資本主義発達史」
15. 大江志乃夫「日本の産業革命」
16. 橋本哲也「三池鉦山と囚人労働」社会経済史学 第32巻 第4号
17. 大牟田市「大牟田産業経済の沿革と現況」
18. 石炭経済調査会「戦時石炭経済構造論」
19. 小田正憲「日本採炭機構論」
20. 奥田八二「九州炭鉦業における労働関係の近代化」(日本近代化と九州)
21. 田中光夫「炭鉦労働者形成過程の研究」

(1974. 1. 3)